

長野県上水内郡飯綱町

平成29・30年度  
飯綱町内遺跡発掘調査報告書  
—二十塚ほか—

2 0 1 9

飯綱町教育委員会

# 例 言

- 1 本書は平成29年度・30年度に実施した長野県上水内郡飯綱町における開発事業に伴う試掘（発掘）調査の報告書である。
- 2 調査は飯綱町教育委員会が実施した。
- 3 本書の執筆・編集は調査担当者である小柳義男がおこなった。遺物の実測・トレース・拓本は柳澤まち子、富岡鹿子、小柳義男による。
- 4 本書に掲載した調査資料（関係図面、遺物、写真等）は、すべて飯綱町教育委員会に保管されている。
- 5 調査体制は次のとおりである。

調査主体者	飯綱町教育委員会		
事 務 局	教育長	馬島	敦子
	教育次長	原	章胤（～30年3月）
		桜井	俊次（30年4月～）
	生涯学習係長	井澤	勇二
主幹	小山	丈夫	
		和田	俊聡
調査担当者	いづな歴史ふれあい館長 小柳義男		
調査参加者	横山かよ子 富岡鹿子 柳澤まち子 細野利男 小柳茂人 宮島史朗		
整理参加者	富岡鹿子 柳澤まち子		
- 6 本報告書に記載した遺跡の調査をおこなうにあたり、関係する多くの皆さんにご支援・ご協力をいただいた。記してお礼を申し上げる次第である。

# 目 次

I 飯綱町の環境と遺跡	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
II 調査の内容及び成果	7
1 庚申塔遺跡	7
2 二十塚	8
3 上赤塩遺跡	24
4 大日影遺跡	29
5 七割遺跡	30
6 鼻見城跡	31
7 北屋敷遺跡	33

# I 飯綱町の環境と遺跡

## 1 地理的環境

飯綱町は長野県の北部に位置し、東北部は旧下水内郡豊田村（現中野市）、南は長野市及び旧上水内郡豊野町（現長野市）、西北部は上水内郡信濃町に接する。

飯綱町からは、北信濃において北信五岳の名で親しまれている飯縄山（飯綱山）、戸隠山、黒姫山、妙高山、斑尾山を一望でき、町域の西端は飯縄山（1,917m）、北端は斑尾山（1,381m）の両火山に接している。町域には両火山の噴出物が広く厚く堆積する。

飯縄山・斑尾山や、三登山、髻山等の山々に囲まれた中央部には標高500m～600m 台の平地（約50平方km）が広がる。この平地は火山噴出物によって鳥居川が堰き止められ、一帯が湖となった時期に形成されたものといわれる<sup>(1)</sup>。この平坦面には矢筒山（566m）・鷲羅山（550m）など、いくつかの独立した円頂丘が点在している。

町域のほぼ中央部には戸隠山を源とする鳥居川が北西から南東に流下し、旧豊野町で千曲川に合流している。鳥居川を境に北部が旧三水村、南部が旧牟礼村であった。

北部には斑尾山を源とする斑尾川が流れ、芋川地区を潤して南下した斑尾川は倉井地区の南側で大きく北東に流れを変えて赤塩地区に入り、旧豊田村を経て千曲川に合流している。南部には飯縄山を源とする八蛇川や八蛇川に注ぐ滝沢川が流れ、高岡地区を東流し牟礼地区で鳥居川に合流している。

飯綱町は、日本海に面する新潟県の高田平野と長野盆地を結ぶ途上にあり、日本海（新潟県上越市）までは約50kmの距離である。古くから信濃と越後を結ぶ交通の要衝に位置しており、古代の官道である東山道から分かれ、越後国府（上越市付近）に至る東山道の支道や、江戸時代初期に整備された北国街道が通っていた。

## 2 歴史的環境

### (1) 飯綱町の遺跡

『飯綱町遺跡詳細分布調査報告書』（飯綱町教委2016）には、211遺跡が報告されている（図1）。これを、時期別にまとめてみると次のようになる。

飯綱町の遺跡・時期別数（遺跡により時期の重複あり<sup>(2)</sup>）

時期	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	計
牟礼地区	8	38	8	8	6	74	34	5	181（115遺跡）
三水地区	8	37	1	0	0	60	25	5	136（96遺跡）
計	16	75	9	8	6	134	59	10	317（211遺跡）
	5.0	23.7	2.8	2.5	1.9	42.3	18.6	3.2	100%

長野県立歴史館のホームページには『長野県史考古資料編遺跡地名表』（長野県史刊行会1981）をもとに集計された遺跡数が掲載されている<sup>(3)</sup>。これと比較してみると、飯綱町の遺跡の特徴が浮かんでくる。

長野県の遺跡・時期別数（時期の重複あり）

旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中・近世	計
330	7970	2099	4415	3206	約1000	19020
1.7	41.9	11.0	23.2	16.9	5.3	100%

## 飯綱町の遺跡・時期別数の特徴

- ① 旧石器時代の遺跡数の割合が比較的高い（野尻湖周辺に足跡を残した旧石器時代人の活動範囲であったか）。
- ② 縄文時代の遺跡数は多いが、長野県全体の傾向と比較すると半分ほどの割合である。
- ③ 弥生・古墳（奈良）の遺跡数はすくない。長野県全体の傾向と比較しても極わずかである。
- ④ 平安時代の遺跡数が非常に多い。長野県全体の傾向と比較しても顕著である。
- ⑤ 中世の遺跡も多く、長野県全体の傾向と比較しても高い割合である。

### (2) 主要遺跡の概観（図1）

時代別に主要な遺跡を概観しておく。旧石器時代は表採資料が主で十分様相がつかめないが、飯縄山麓のだづま原遺跡（18）、宮浦遺跡（2）などで尖頭器等が出土している。西樽川遺跡（3）では台形石器が、宮浦遺跡からは上部野尻湖層Ⅱ最上部の漸移帯（モヤ）からスクレイパーが出土している。町内最古の資料である。

縄文時代草創期は、だづま原遺跡から尖頭器、スクレイパーなどが、下向山遺跡（4）から有茎尖頭器が出土しており、原遺跡（124）からは、多縄文系の土器群などが表採されている。

早期の遺跡も小規模であるが高坂の丸山遺跡（31）から出土した絡状体圧痕文土器は、社会科の資料集に掲載されるなど広く知られている。宮浦遺跡では、一列に並ぶ大規模な落し穴状遺構が検出されている。

前期の遺跡は丸山遺跡、原遺跡、伊豆ヶ入遺跡（200）などがある。丸山遺跡からは関山期の住居跡1棟と諸磯期の土坑18基が検出されている。17号土坑からは、ほぼ完形の大小2個体の有孔浅鉢形土器が出土した。伊豆ヶ入遺跡（芋川遺跡と報告されていることもあり）は古くから知られた遺跡で藤森栄一や神田五六によって紹介されている。小野遺跡（198）からも有尾期の住居跡が1棟検出されている。

中期の遺跡には上赤塩遺跡（161）、東柏原遺跡（206）、古城遺跡（123）と規模の大きな遺跡がある。上赤塩遺跡は中央部に広場をもつと思われる弧状の集落遺跡で、中期前葉から中葉の13棟の住居跡が検出されている。小玉遺跡（43）からは中期後葉の住居跡1棟などが検出されている。

後期の遺跡は明専寺遺跡（15）から2棟の住居跡や土坑が、八蛇川を挟んだ対岸の茶磨山（茶白山）遺跡（26）からも大量の土器・石器が出土している。小玉遺跡からは後期初頭から中葉に至る土器群が多数出土している。特に「石神類型」の土器群は注目される。小野遺跡からも敷石住居跡1棟などが検出されている。

晩期の遺跡は茶磨山遺跡、橋詰遺跡（旧栄町遺跡を含む）（63）などがある。

弥生時代・古墳時代の遺跡は希薄であるが、長野盆地を見下ろす平出地区の南部に古墳がある。庚申塚古墳（110）は全長約52mの前方後円墳である。墳丘裾部の調査で葺石状の石列と埴輪が検出されている。埴輪は朝顔形埴輪と円筒埴輪があり、円筒埴輪には類例の少ない格子目叩きが施されており注目される。

奈良時代の遺跡も希薄である。平安時代になると遺跡数は急増するが、規模の大きな遺跡は確認されていない。丸山遺跡からは3棟の竪穴住居跡が、前田遺跡（53）からは4棟の竪穴住居跡と掘立柱建物跡等が検出されている。このほか、平出地区を中心に須恵器の窯跡が集中しており、前高山（82）、上ノ山（86）、家岸（88）の各窯跡が調査されている。平出の西浦北遺跡（西浦遺跡）（91）からは粘土採掘坑とみられる土坑群も検出されている。製品の搬出には牟礼地区を通過していたと考えられている東山道の支道も利用されたものと思われる。

平安時代末から鎌倉時代にかけて、町内は芋川荘（芋川地区）と太田荘に属す区域に分かれたようである。太田荘域には島津権六郎が居城したと伝承される矢筒城館跡（60）がある。山城は矢筒山を利用し、麓に館跡がある。南側の表町遺跡（62）は城下であったと伝承されてきた。数次にわたる矢筒城館跡と表町遺跡の調査によって、幅9～12m、深さ3.5mにおよぶ内堀の一部や南北350mにわたる15世紀後半から16世紀前半の集落跡が確認された。芋川荘域には、芋川氏館跡（144）、若宮城跡（201）、鼻見城跡（193）、小野遺跡などがある。

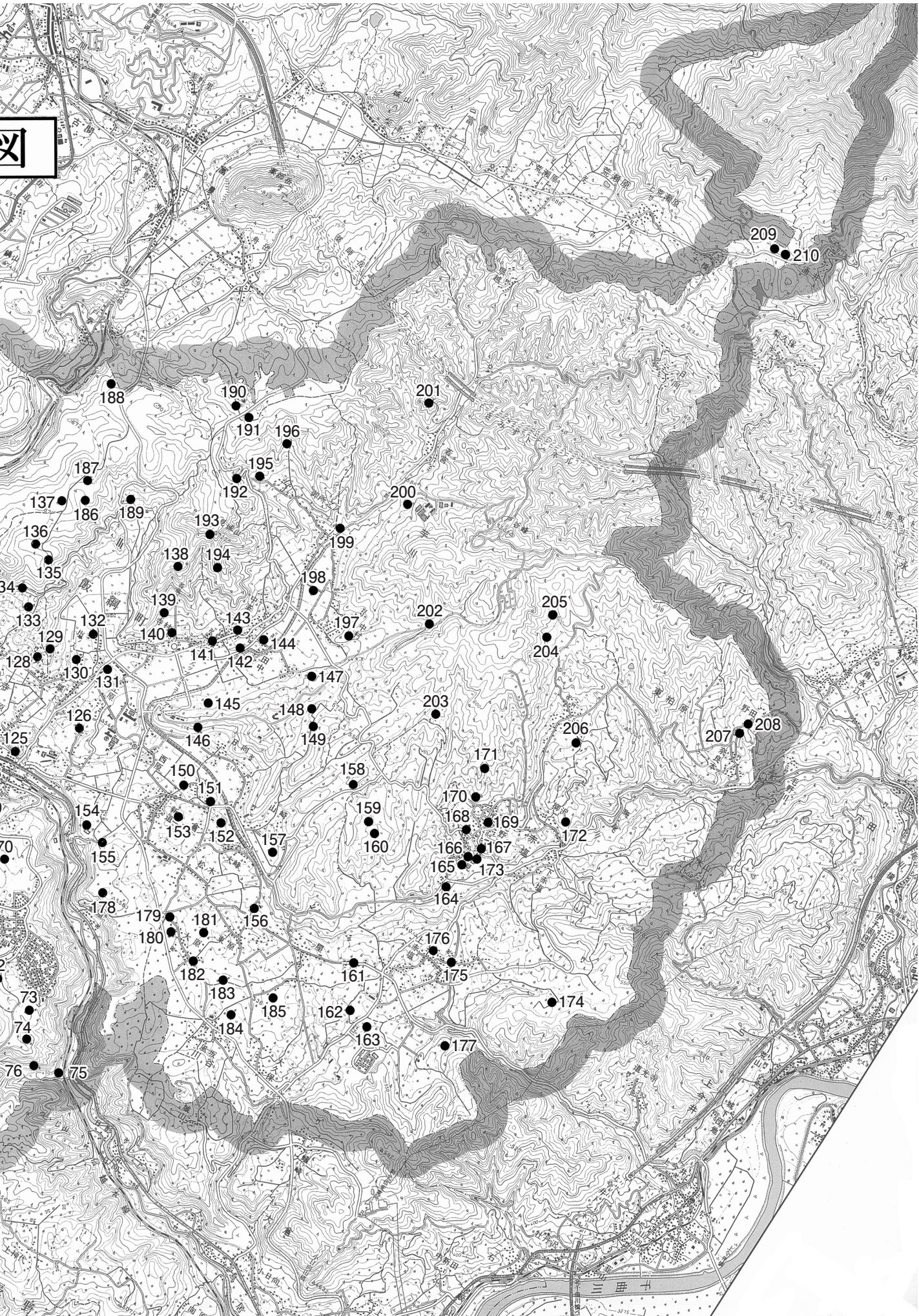
芋川氏館跡を中心とする数次の調査で、館の主郭は8m幅の堀に囲まれた一辺60mの方形区画であったこと、堀底には変化に富んだ障壁土坑からなる障子堀が設けられていたこと、芋川氏の会津移住後にも、堀に添って柵列が設置されてことなど重要な所見が得られている。

小野遺跡からは12世紀後半～13世紀前半に始まる建物群が検出されており、14世紀代の空白期をはさんで15世紀前半まで継続する。芋川荘の現地管理者である在地領主層の館の可能性が高いことが指摘されている。



飯綱町遺跡分布図

図1 飯綱町遺跡分布図（『飯綱町遺跡詳細分布図調査報告書』より作成）



注

- 1) その時期は、長野県埋蔵文化財センターの調査では約2～4万年前頃と考えられている（中野2009）。
- 2) 『飯綱町遺跡詳細分布調査報告書』より作成。なお同書で「四ッ屋一里塚（遺跡番号113）」の時期を中世と記録してあるが、近世の誤りである。また近世遺跡は窯跡、経塚、一里塚、境塚など限られた遺跡を登録している。
- 3) 長野県立歴史館のホームページには、古墳時代の遺跡数884、古墳3531基と分けて記載されているが、本表では一括している。中・近世（約1000）は1000として集計している。

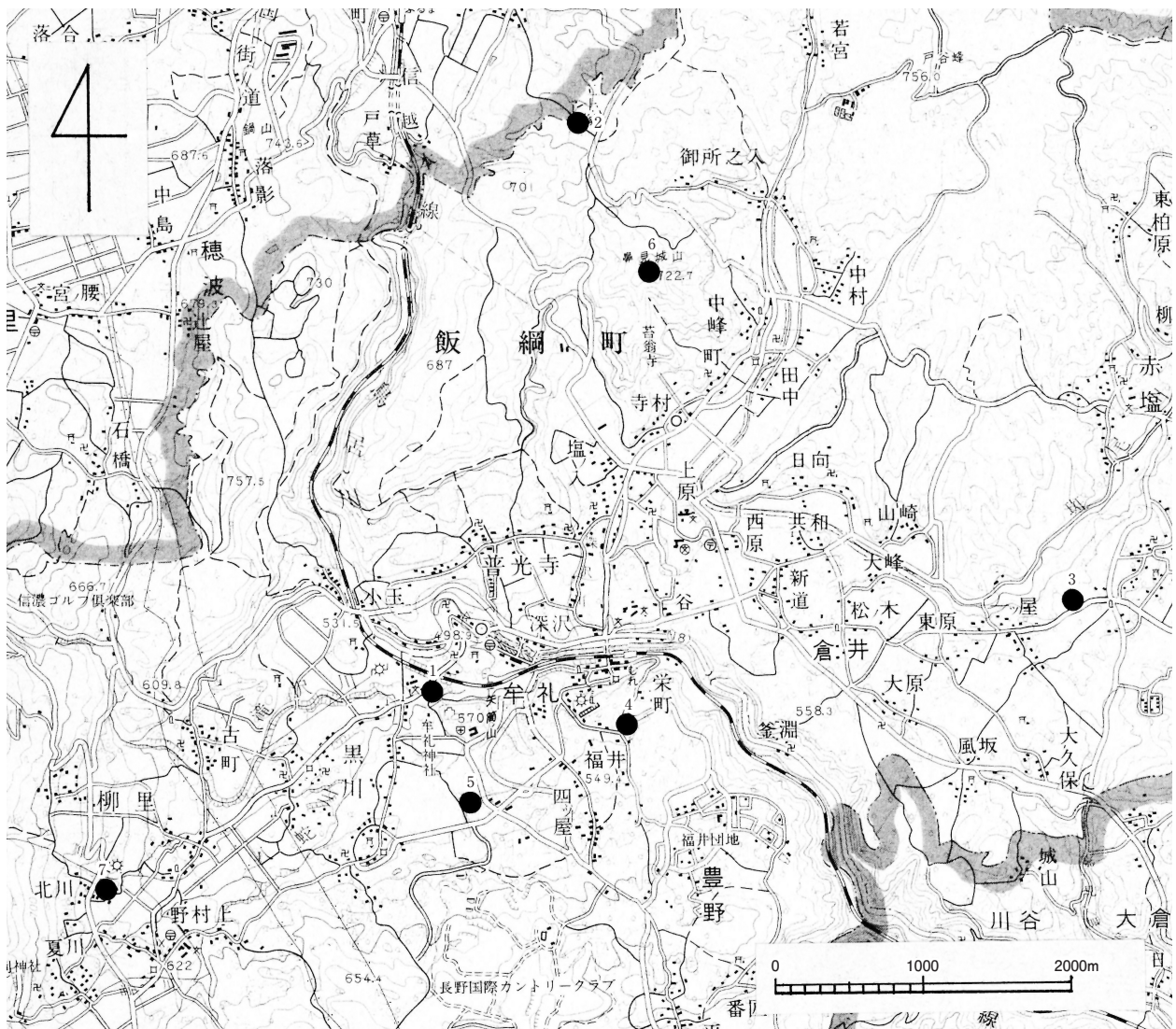


図2 調査地点（飯綱町役場平成25年1月作成 1：50,000地形図使用）

## Ⅱ 調査の内容及び成果

### 1 庚申塔遺跡（図2-1）

#### A 概要

所在地	飯綱町大字牟礼2489-1、2494-9番地 北緯 36° 75' 10" 東経138° 23' 11"
原因	個人住宅建設
調査方法	試掘調査
調査期間	平成30年3月26日
調査面積	21.8㎡
出土遺構	柱穴 1
遺物	須恵器 1点、土師器 1点、内耳鍋 1点、 カワラケ 2点

#### B 調査の経緯と遺跡の概要（図3）

試掘地は、文化財保護法に定める「周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）」にあたる庚申塔遺跡（図1-48）の東端付近に位置する。個人住宅の建設が計画されたため、遺跡の範囲と規模を確認し、発掘調査の時期等を協議するために試掘を実施した。

庚申塔遺跡（48）は、飯綱町大字黒川と大字牟礼、大字小玉の境付近に立地する牟礼東小学校（現牟礼小学校）の敷地を含む一帯を範囲とする。『牟礼村遺跡詳細分布調査報告書』には、弥生時代、平安時代、近世、近代の遺物の出土を記している。『中郷村史』には、「中学新築の折、便所跡から弥生時代後期及び土師器が出て居る」と記されている。古くから知られている遺跡であるが実態が十分つかめていない遺跡である。

平成25年には、遺跡西南部にあたる牟礼東小学校プール建設地で試掘調査を実施している（小柳2017）。調査の所見では、校庭整地層が20～60cmあり、その下の黑色土層（Ⅱ層）から須恵器や中世の遺物がわずかに出土しているが遺構は検出できず、当該地は遺跡の中心部をはずれていると判断されている。平成29年度には、牟礼東小学校の特別支援教室建設や児童バス乗り場整備にともなう試掘調査を実施したが、ほとんど包含層が削平されており遺構は確認できなかった、また出土遺物もごくわずかであった（小柳2018）。

#### C 調査結果（図4）

予定地の敷地にそって、およそ東西方向に2か所のトレンチを設けた。住宅は全面に盛土をし、削平は現地地表下10cmにとどまる計画であったので、重機によって地表下40cmをめどに順次削平することとした。

まず敷地南端に長さ11m、幅1mのトレンチ（以下T1）を設けた。層序はⅠ層（表土）（20cm程度）、Ⅱ層（黒色土層：10YR1.7/1）（20cm以上）となる。T1西端付近ではⅡ層下にⅢ層（礫混じりの黄色土層：10YR5/6）が存在することを確認している。遺構は、Ⅲ層表面で柱穴状の落ち込みを1か所確認できたが、住宅建設にともなう破壊は免れるため掘り込みは実施していない。遺物は、須恵器（糸切底の坏）、土師器（坏）、内耳鍋の小片が各1点出土している。

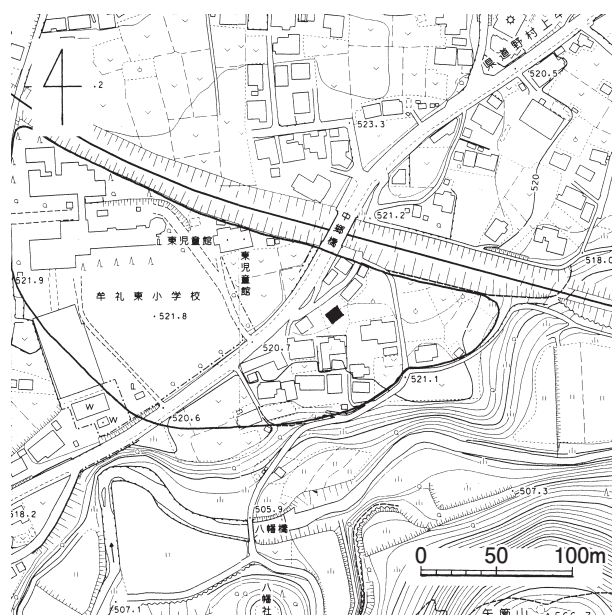


図3 庚申塔遺跡 範囲と調査地

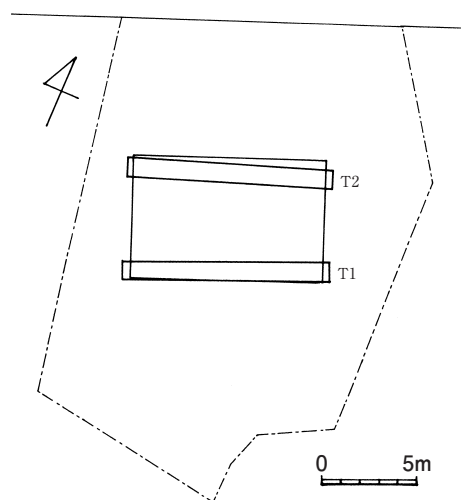


図4 庚申塔遺跡 調査位置図



次に敷地北端に長さ10.8m、幅1mのトレンチ2（以下T2）を設けた、重機によって順次削平していった。層序はT1と同様であった。遺構は検出できなかった。遺物は、カワラケが2点出土している。ともに糸切底である。1点（図5）は、ほぼ完形で、口径7cm、高さ1.9cmと小形である。胎土は、にぶい黄橙色できめ細かい。微量の雲母と（酸化して）赤化した粒が含まれる。

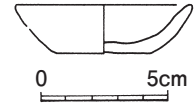


図5 庚申塔遺跡 出土遺物

2か所のトレンチの所見から、建設に伴う遺跡への影響はないと判断し、調査を終了した。

## 2-1 二十塚（図2-2）

### A 概要

所在地 飯綱町大字芋川字廿塚2158番地、2161番地

北緯 36° 47' 07"

東経138° 14' 38"

原因 本発掘のための試掘確認調査

調査方法 試掘確認調査

調査期間 平成30年7月9日～7月20日

調査面積 約45㎡

出土遺構 塚4基（11、14、15、17号）

遺物 古銭（11号：元符通寶・開元通寶、14号：祥符元寶、15号：紹熙元寶・景祐元寶）、旧石器1点（11号）、近現代陶磁器片、磨石1点

### B 調査の経緯と遺跡の概要（図6・写真1～3）

調査地は、文化財保護法に定める「周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）」にあたる二十塚（図1-190）に含まれる。塚周辺の山林の伐採・間伐にともない塚の一部が損壊したため、本発掘調査の規模、見通しをたてるため、塚の損壊状況に応じて保護層を含めた範囲を人力で削除し、遺物包含層の状況の確認及び土層の記録をとるため試掘確認調査を実施した。

#### 二十塚の位置

二十塚（廿塚）は、飯綱町大字芋川の北西、信濃町との境に接する山林内にあり、標高は715～720mほどである。比較的平坦な面が続くが、北西方向に緩く傾斜している。1号塚と21号塚の間では、4mほど標高差があることになる。

延宝5年（1677）の「芋川村畑方検地帳」に、「廿塚」と記されているのが最古の記録である。元禄8年（1695）の「芋川村新田畑検地帳」にも「畑方」に、「二十塚久保」「二十塚」の名がみえる（『三水村誌』）。いいかえれば、延宝5年以前に二十塚が存在していたのである。

二十塚周辺は比較的平坦な面が広がっているため、古くから畑地として利用されてきたことが伺える。

塚の南側を通る道は川東道とも呼ばれ、小林一茶も飯綱町東部の赤塩（毛野）や浅野方面を行き来するさい利用している。文化4年（1807）8月7日には、「七日湖

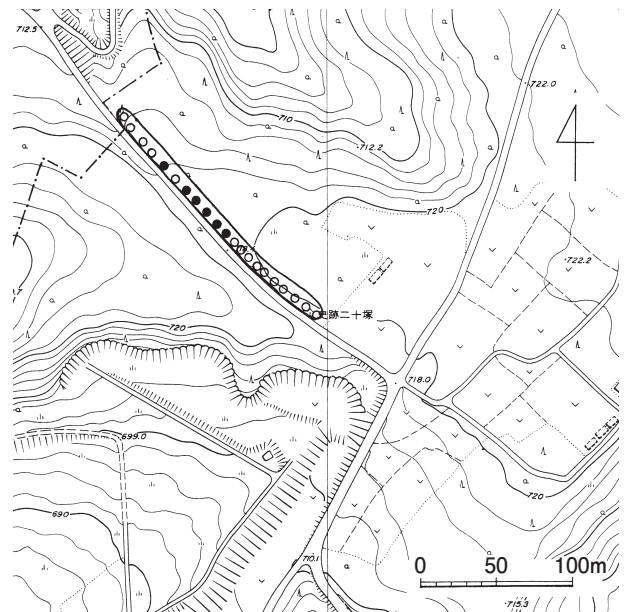


図6 二十塚 範囲と調査地

光とおなじく、きのふの道をもどる。二十塚という所より二人か在所見ゆ けぶり見へ戸隠見へて肌寒き」と記している（『文化三―八年旬日記写』）。また、文化7年5月18日にも「足のいたみ常ならず、木末一本をあが仏とたのみて僅五里ばかりを三日かゝりて、漸古郷見ゆる二十塚といふ山に至る」（この日、一茶は前日泊まった毛野の滝沢家を立ち、野尻の魯童宅に泊まっている）と記している。現在、周辺は山林となり眺望がきかないが、当時は柏原方面も遠望できたようである。

### 二十塚の伝承

『長野縣町村誌』に記載される芋川村【二拾塚】の項には、「前の番所に接續し、舊北越街道の北側にあり、塚高五尺、周圍六間餘、其數二十、一行にあり。塚間各々五間、此邊の字を中城と云ふ、往古合戦の時旗塚ならんか。後人の正考を俟つ」（明治15年：1882提出）と記している。

二十基の塚が一行に並ぶこと、塚の高さは五尺、周圍六間程、互いの塚の間は五間ほどであると塚の状況を書き記している。また、昔の合戦時の旗塚であろうかと、その用途にもふれている。二十塚の具体を知る最初の記録である。

明治26年（1893）8月、当地（赤塩）の友人を訪ねた田山花袋は、赤塩から芋川を経て二十塚に至り、古間を経て野尻で一泊し、翌日戸隠を訪れ長野に下ったことがあった。この時の様子を明治32年（1899）、「北信の遊跡」と題して次のように記している。

「（前略）やがてわが傍に、古塚のごときもの累々として幾箇となく並びたるを認めれば、傍なる友に、こは何といへるものにやと問ひぬ。「そは二十塚といへるものにて、上杉謙信が越後より兵を信州へと出せる時は、いつも先こゝに旗を立てたりといへる古蹟なり。昔はその數二十ありたるより二十塚と呼ばれ初めたるよしなるが…」かく言ひしが、友は更に言葉の調子を改め、「殊更にかく遠く川中島四郡の地を見渡したる山の絶巔を選びて、幾旒とも知れぬ軍旗を盛に押立たる軍略を面白しと思ひ給はずや。謙信はいつも武田勢出でたりときくや否、袂を投じて、軍馬より先に、先此處に来て、第一に軍旗を立つるを常としたるよしにて（後略）」

ここでも、旗塚としての伝承を伝え、より具体的に塚に旗をたてたのは上杉謙信としている。

『信濃寶鑑』（明治34年）には、「二拾塚 番所に續接して舊北越街道の北傍にあり其數二拾一行にして各五間を隔て、建つ然してこの邊の地字を中城と云ふ蓋し甲越合戦の際の旗塚ならんか」

と記される。『長野縣町村誌』の記述をもとにした内容である。

昭和8年（1933）、清水某氏の「芋川地名考」には、「二十塚＝芋川京洛を西に登り切りたる稍平地にあり すり鉢状の塚二十箇を存す 里人旗塚と称し戦鬪の標識に旗を立てたるなりと傳ふれと不詳なり」と記す。

『三水村誌』（1980）には、「二十塚 番所に接續して、本村でもっとも利用され、さらに利益をもたらした川東道の北端に旧舟岳村（現信濃町）と界を接する直前の道路添いの東側一列状態になっている。その数は二一個、各一〇mの間隔で、周圍一五m。高さ一m半の規模で上に松が植えてあり樹齡も一定しない。一番老樹でも一五〇年ぐらいで枯死して、そのつど捕植したようである。もちろん松の木のないものもある。一番興味があり大事なことは由来であるが、地名の「京洛」、「御所」にまつわる貴族の墓、川中島合戦の武将の墓とかいろいろな説があるが、川中島合戦の旗塚が有力であろう。この辺の地名を中城と云って、当然その名のとおり南方の鼻見城、北方の若宮城の中央にあり、その近辺には高いところがあり、信号を送るに差しつかえがあるので、削って低くし見易くしたところがあるのでそれが無難な見方であろう。発掘調査まではゆかないが、何人もの人が鉄棒とかで検査を試みたが何も見つかっていない」と記述されている（1592頁）。

これまで塚の数はすべて20と記されていたが、どうしたことか『三水村誌』では21基と数えている。同書には「芋川二拾塚の状況」を示す図も掲載されているが、ページをまたいでいるうえ（表裏）、道路を挟んで並ぶかのように（二列）配置しておりわかりにくい。塚の番号順に間隔の情報をもとに一行に配置して作図したのが第7図である。

塚の由来（伝承）については、①地名の「京洛」、「御所」にまつわる貴族の墓、②川中島合戦の武将の墓、③川中島合戦の旗塚の三説があることを紹介し、③が有力であろうとしている。

なお、別の箇所（282頁）で、「源平の昔、越後の豪族、城ノ太郎資永に攻められた依田城主が苦境に立って援を

木曾義仲に頼んだので、義仲急ぎ来り、二十塚に陣し激戦となった。その時の戦死者を葬った所が二十塚だという説」もあることを記している。

『三水村の文化財』(1992)には、「平均10m間隔で道路東側に1列に並んでいる。1基は境を越えて舟岳地籍にある。なお上の松は、明治中期に植えられたものである。この道は北国脇往還で、運上金逃れで当時は賑わったが、当然訴訟事件も起こった。地籍が中城になっているので、前方の鼻見城、後方の若宮城の中間の意味かと思われる。付近には火山灰に覆われた広大な土地があり、眺望がすこぶる良好である。構築された目的はいまだに不明である。言い伝えによると、甲越合戦の旗塚か、高貴の人の墓地とか言われている。また堺にあるので堺塚かとの伝承がある。村内に同類のものが2か所あって、近年道路開発に伴い発掘したが、何も出土しなかった(後略)」と記す。

近年道路開発に伴い発掘したというのは、後述する「倉井の虚空蔵山にある十三塚」を指していると思われる。「堺(境)塚かとの伝承がある」というのは、『長野縣町村誌』以来百年を経て初出である。諸説それぞれに決めてがなく、「伝承」が独り歩きしていることを示しているのではなからうか。「地籍が中城」と記される点については(『長野縣町村誌』、『信濃寶鑑』にも「地字が中城」とある)、現小字名および芋川村検地帳にも「中城」の名は記載されていない。『三水村誌』(282頁)には「二十塚 北国東街道の北側にある俗に中城<sup>なかじょう</sup>という所にある」とも記されており、字名ではないようである。

上記をまとめると

- ・ **構築時期** 城氏と小曾義仲の戦い後  
川中島(甲越)合戦時
- ・ (だれが 上杉謙信)
- ・ **目的** 旗塚(軍旗をたてる、戦闘の標識に旗をたてる)  
墓(武将・貴人)  
境塚
- ・ **大きさ** 周囲:六間余、一五m、高さ:五尺、一m半
- ・ **塚の数** 20と21の記述あり

次に、飯綱町内の塚について若干ふれておきたい。

#### 飯綱町の塚

「塚」は、「中・近世において、修験道や民間信仰から発生した、信仰的行為の具象的な“モニュメント”である」(野村1986)、あるいは「土や石、あるいは木の枝を人工的に積み上げたり、盛った信仰的構築物の総称。…その性格は祭場・祭壇を主としながら、死者供養・境界指標・辟邪・厄除け・修法壇を示している」(佐野2000)とされる。

『飯綱町遺跡詳細分布調査報告書』には、以下の「塚」が掲載されている(図1)。これらの塚は一見して盛り上がった状況が確認でき、あわせて文書や伝承の残るものが主となる。

塚の峰遺跡(30)、小玉一里塚跡(39)、本塚遺跡(68)、三本松遺跡(行人塚)(81)、経塚山経塚(98)、四ツ屋一里塚(113)、富士塚(117)、華巖塚(129)、越智塚(133)、小富士塚(138)、関取場経塚(156)、論所境塚(188)、二十塚(190)、町浦経塚(194)、霊仙寺山境塚(211)。

このうち経塚や境塚・一里塚は、出土遺物や文献(絵図等)で、その目的を知ることができるが不明なものも多い。二十塚もその一つで、前述したように諸説ありの状況である。旗塚説が有力とされるが、その根拠は、眺望が良い、(遺物が)何もみつからないといった程度である。

「旗塚」については、長野市周辺の「旗塚」を調査した労作がある(町田2018)。氏は「伝承があり、文献からも確認できる」ものを旗塚としているが、文献に残るものは明治以降の伝承を記録したにすぎない。まず合戦図や同時代の古文書で「旗塚」の存在や形状など確認することが必要となろう。とはいえ、30か所以上の「旗塚」を調査しその立地・形態等紹介されたことに敬意を表したい。同書では「飯綱町の二十塚は史跡に指定されているはずなのに、重機に裾を削られたり、伐採した木を乗せられたりしていた。」とご指摘いただいたことも、本調査実施の後押<sup>(1)</sup>となった。

二十塚と同様にいくつもの塚が並ぶところが、ほかに2か所ある（久遠2002）。

一つは、二十塚からは南に1.4kmほどの南下がりの山腹（苔翁寺の裏山、芋川用水の北）に位置する塚群である。二十塚からは、小富士塚（図1-138）を経てつながる尾根道がある。

久遠によれば「（小富士塚の）その下を少し行くと高さ1<sup>㍊</sup>位の塚が見られる。そこから西へ点々と約三十個程数えられる。これも何も入っていないので旗塚と云うより仕方がない。これは少し急坂なため高さも長年のためか崩れているのが目につく」という。

もう一か所は、「倉井の虚空蔵山にある十三塚」である。飯綱町詳細分布調査報告書で「伝虚空蔵砦跡」（図1-146）とした地に接する。二十塚からは南南東2km、苔翁寺の裏山の塚からは芋川地区の水田地帯をはさんだ南東900mの小高い山頂から延びる尾根上に位置する。久遠によれば「一番高いので1<sup>㍊</sup>位で都合、十三塚が目測出来る。これは仏教と関連ありそうだ。一不動から十三虚空蔵まであり何となく意味がありそうだ。調査に行ってみると丁度に重機があったので発掘して貰ったが何一つ出土しなかった。これも旗塚と考えられたが、考えによっては山岳宗教で山伏僧が十三か所に祈願したのではないかと思われもした」（久遠2002）と記している<sup>(2)</sup>。

当地では、ほかに「十三塚」は確認されていない。十三塚については、発掘事例をまとめた村田文夫氏は次のように指摘している（村田1985）。①塚の数は、十三が基本。②中央の塚が、ひときわ大きい。③塚の平面プランは、円形が支配的。④塚の全長、塚間の距離は、占地する地形上の制約によるところが大きい。⑤立地は塚がフラットな地形部分に一列に並ぶ「平坦型」と、やせ尾根部分に十三塚がひしめく「尾根状型」とに大別できる。⑥出土遺物は、ほとんどない。虚空蔵山の十三塚の旧状が不明なため、②は確認できないが、円形プランの尾根状型になる。

以上紹介してきた塚では、三水村誌も記述しているように「発掘調査まではゆかないが、何人もの人が鉄棒とかで検査を試み」たことがあったようであるが、「何も見つかっていない」ようで、塚の性格はつかめていない。

#### 発掘された塚

町内で唯一発掘調査された塚に「行人塚」（三本松遺跡）（図1-81）がある。行人塚は、三本松と通称され、大字平出字行人塚2952番地に所在する。延宝7年（1679）の平出村畑方検地帳にも行人塚の名が記載されている。地名や北国街道端に位置する塚であることから、『中郷村史』は「修験道人の墳墓か又は、旅する人達の不慮の死に対する供養塔でもあるか」と記している（清水他1960）。

平成2年（1990）県道の拡幅工事に伴って塚の裾部分を調査したところ、2基の墓が検出され、それぞれから一体ずつ人骨が出土した。また、二号墓からは寛永通宝が1点出土している（小柳1992）。

2人の墓は塚の中心部をはずれており、盛土層を切って葬られていたことから、もとからあった塚を利用したと思われる。行人塚の本来の性格はいまだ明らかになっていない。塚に墓を設けるといふ行為の中に、当時の人が行人塚に寄せていた思いが隠されているように思われる。

### C 調査結果

#### (1) 調査の概要

##### ① 塚の現況（図7・8）

三水村誌に掲載された塚の状況図に現況の位置図を並べてみると（図7）、当然ながら多くは一致する。そうしたなかで、村誌掲載図と比較すると、現在1号塚としたものの東にもう一基の塚が存在し、さらに21号とした西端の塚は数に含めていないように読み取れる。村誌編纂時に所在した塚が破壊され消滅してしまったのであろうか。

加えて、そもそも塚の数は20なのか、21なのかという問題がある。現状で1号とした塚は、他の塚と比べ、形も崩れており、高さも低い。塚かどうかと判断に迷うところがある。この塚を含めていなかったとすれば「二十塚」になるのだが。

いずれにしても、村誌掲載図と現況では東西の両端で位置関係が一部合致しない。本報告では、現況に沿って、塚状の高まりを確認できる箇所（約200mの間）を東から順に1号…21号とした。

塚の位置 周辺地形図を含めた塚の測量と測量基準点（世界測地系）の設置（1～5）の設置およびグリッド設定は、株式会社共栄測量設計社に委託した。

表1 二十塚の現況

塚番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
底部幅(m)	4	6	5.2	6.1	6.8	7.4	6.3	7.3	5.7	6.1	5.1	5.7	6.6	5.4	4.4	5.5	5.6	4.5	4.5	4.6	4.0
奥行(m)	3.5	4.7	3.9	4.6	5.1	4.7	4.9	5.2	5.6	4.3	4.5	4.8	5.7	4.1	3.6	4.6	4.4	5.1	5.3	4.6	3.0
高さ(cm)	45	80	80	65	65	85	90	80	80	75	80	76	100	75	75	80	80	56	100	62	65

5点の測量基準点の座標は3-1 (X 87043.020 Y -22740.504 Z 717.828)、3-2 (X 87231.341 Y -22937.809 Z 715.665)、4-1 (X 87091.530 Y -22797.763 Z 719.715) (北緯36° 47' 04.7"、東経138° 14' 40.4")、4-2 (X 87138.492 Y -22861.015 Z 719.213) (北緯36° 47' 06.2"、東経138° 14' 37.9")、4-3 (X 87200.427 Y -22905.500 Z 717.649) (北緯36° 47' 08.2"、東経138° 14' 36.1") の地点である(測量基準点の数値は、世界測地系2011による)。これを基準に4m間隔のグリッドを設定した。

塚の大きさ (現況) (表1・図8)

共栄測量設計社の実測図(100分の1)をもとに計測した。幅・奥行：数値は道路側からみた幅・奥行である。高さは、塚の頂部と塚周辺の最も低い地点との差とした。

塚の大きさ：多くは径4.5~7mほどの大きさで、抜きんでて大きい塚は見られない。これまでの記述には、周囲「六間余」、「一五m」とあり、径はおよそ3.5~5m弱となる。計測位置や方法など明らかでないので比較しにくいですが、現況はやや大きめの数値となっている。

高さは、「五尺」あるいは「一m半」との記録に対し、高いもので1mほどしかない。後述するように、路面部分は土砂が搬入されて高くなっているため差し引いて考えとしても、頂部に植えられた松もほとんどが枯れてしまったため、塚の盛り土が流失(崩落)していることをしめしている可能性もある。

② 1次調査の概要 (図9)

山林の伐採時に破損した塚は数基に及んだが、軽微な個所は、移動した土を元に戻して修復した。

破損部分のめだつ4基(11・14・15・17号)は、調査後の修復も考慮して、破損部を含めて塚の半分を発掘調査することとした。11・14・17号は道路側の半分を、15号は北西側の半分を掘っている。

11号塚から調査することとし、塚上および塚周辺、土置き場の草刈りに着手した。すでに塚の測

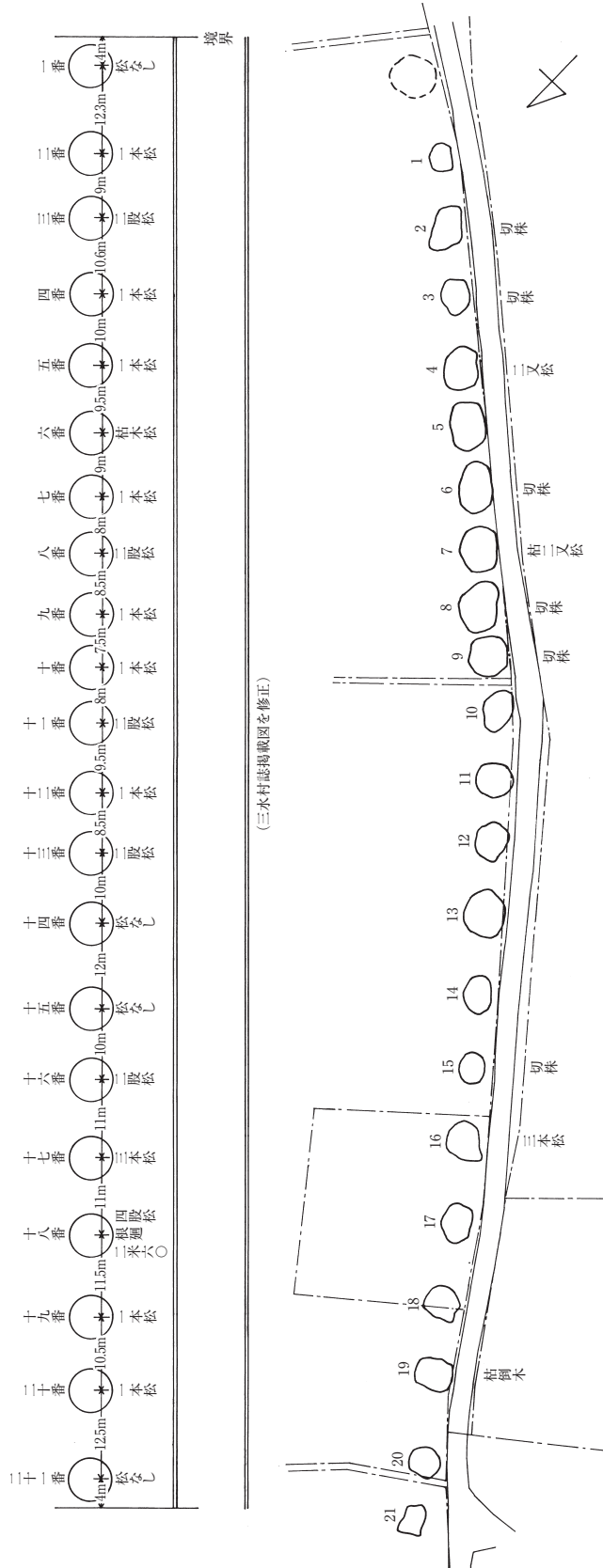


図7 二十塚 位置図



図8 二十塚 地形図 (共栄測量設計社作成地形図を使用)

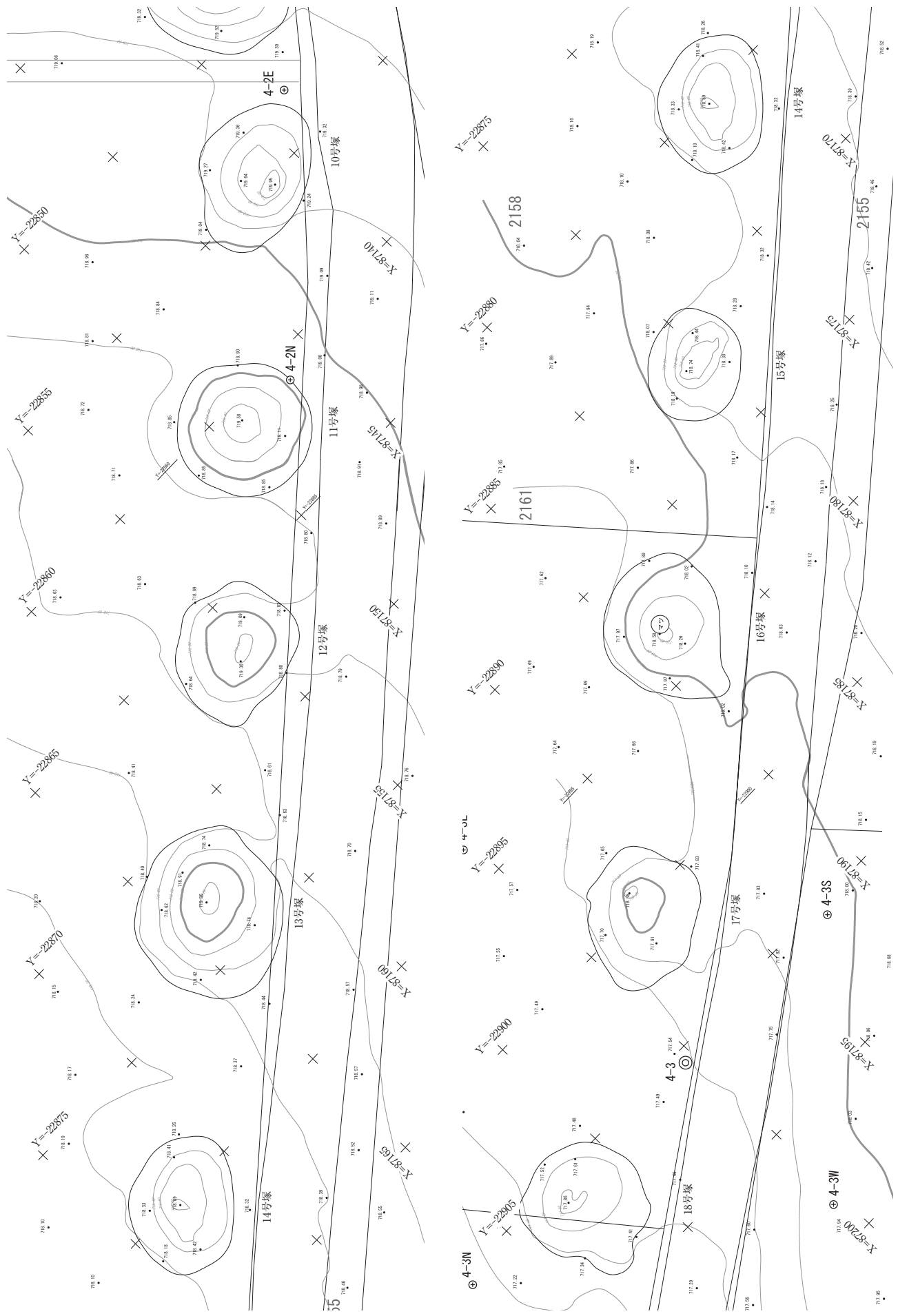


图9 二十塚 塚実測図 (10号塚~18号塚)

量は終了していたため、測量基準点の確認および周辺の草刈りも実施した。

塚の用途や構築年代が不明なため、それらの手掛かりを得ることを目的にすべて手作業による調査とした（掘り上げた土も元に戻すことを考え、他の塚と混じらないようにした。予想以上に土量が多く、土置き場の確保とそこまでの移動が大変であったことを付記しておく）。

塚周辺部の層序は、落ち葉や腐葉土、草木の根などの混じる表土（Ⅰ）、黒色（10YR1.7/1）土層（Ⅱ）、暗黒褐色（10YR3/3）土層（下部はローム混じる）（Ⅲ）、黄色（2.5Y8/8）粘質土層（ローム層）（Ⅳ）となっている。

塚の盛土は、落ち葉や腐葉土、草木の根などの混じる表土（Ⅰ）の下は、遺跡周辺の「黒ボク」と通称される黒色の火山灰土によって構成されており、11号塚の発掘当初は層序の区別にとまどった（なお、以下に記述する塚の層序の数字は適宜つけたもので、他の塚と同じ数字であっても層序の内容が同じことを示すとは限らない）。

14号塚の旧地表面に近いと思われる部分で硬い面（カチカチ、ツヤツヤ）が広がるのを確認した。15号・17号でも同様に硬い面がブロック状に重なることを確認し、これを分層の手掛かりの一つとした。ブロック状に存在する硬い面は、構築時に突き固めた可能性があると考えた。

調査は、ローム面（Ⅳ）まで掘りこみ、塚の下に遺構（墓穴等）がないことを確認した。

遺物は5点の宋銭（11号：開元通寶・元符通寶、14号：祥符元寶、15号：景祐元寶・紹熙元寶）の外は、近現代の陶磁器、旧石器の剥片などであった。明銭や寛永通宝などの江戸時代の貨幣が出土しておらず、塚は中世に構築された可能性があると考えた。

### ③ 1次調査の結果

#### 11号塚（図9・10、写真5～8）

形状・規模：ほぼ円形。調査部の径5.6m、高さ（土を盛ったと思われる部分）95cm。

層序（図11）

各塚に共通するが、塚内部は木の根やネズミ等があけたと思われる穴が各所にみられた。Ⅰ層下部の黒色層（1～4）は、山形に中央部が厚く盛られている。1から4は、土の硬さも考慮して分層したもの（やわらかい⇒しまりあり⇒やわらかい⇒しまりあり）で、土の色等には大きな差は確認できなかった。Ⅲ層面から造作が開始されたようで、塚の端部ではⅢ層が（削平されてか）薄くなる。その上にⅣ層等を（ほとんど）混じえず、黒色土を盛っている。

15号塚の調査後、断面をみかえし黒色土の硬い塊（b）がブロック状に残っていることを確認して断面図に追加した。

出土遺物（図24） 古銭2点、陶器1点、磨石1

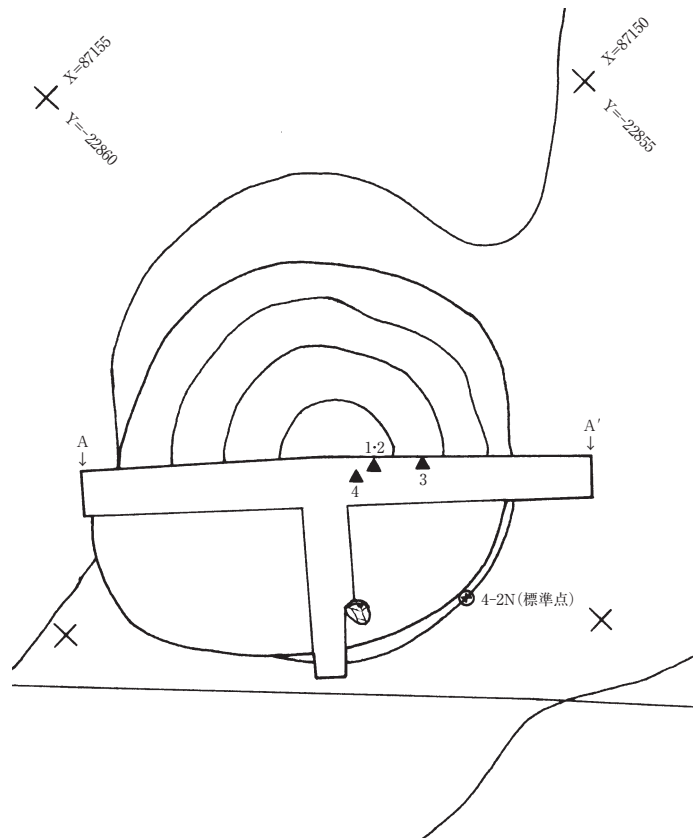


図10 11号塚 調査地

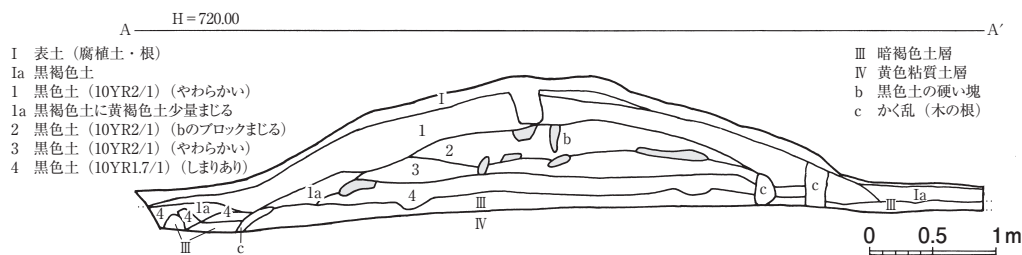


図11 11号塚 土層図



点、旧石器剥片 1 点

古銭 図10-1の地点の1層下部から元符通寶（北宋銭：初鑄1098年）（図24-10）が出土した。そこから数cm離れた下層3cm程の位置からも開元通寶（唐銭：初鑄621年）（図24-11・写真6）が出土している。

陶器 すり鉢の小片が出土している。時期は不明。

磨石（図24-9）：表面が磨かれた石が図10-4の地点の2層上部で平らな面を上にして出土している。破片のため、長さ（現況20.7cm）、幅（現況15.9cm）とも不明。あるいは大型の石皿かもしれない。安山岩系の石である。

旧石器（図24-4）長さ8.5cm、幅4cmほどの剥片。頁岩系の石で重さは59.5g。図10-3の地点の3層上部から出土している。

磨石・旧石器ともに、塚周辺にあったものが、構築時に取り込まれたものと思われる。13号塚の下からも旧石器が出土しているので、二十塚周辺に旧石器時代の遺跡が存在するようである。

14号塚（図9・12、写真9～12）

形状・規模：ほぼ円形。調査部の径（推定）7mほど。高さ100cm。塚は路面下に続くようであったが、現用道路であるため路面下の調査は実施しなかった。

層序（図13）

頂部が削平されたり寄せつけられた土がのっていたりしたが、基本的な層序は11号と同様である。北西側の3層上部に黒色土の硬い面（b）が広がるのを確認した。この面はカチカチ、ツヤツヤとしており、平面をなして並ぶように検出された。性格をつかめなかったので、下部の掘り込みはせず、そのまま保存することにした。15号塚の調査後、断面をみかえし黒色土の硬い塊がさらに南にも広がっていることを確認して断面図に追加した。

出土遺物（図24） 古銭 1 点、磁器 2 点（小皿、皿）

古銭：図12-1の地点の2層上部から祥符元寶（北宋銭：初鑄1008年）（図24-12）が出土している。

磁器：ほぼ完形の皿が出土している（図24-3・写真11）。塚の道路側裾部分（図12-2）のI層直下で、口縁部を下にしていた。口径12.8cm、高台径7.1cm、高さ2.1cmの皿である。いわゆる「一

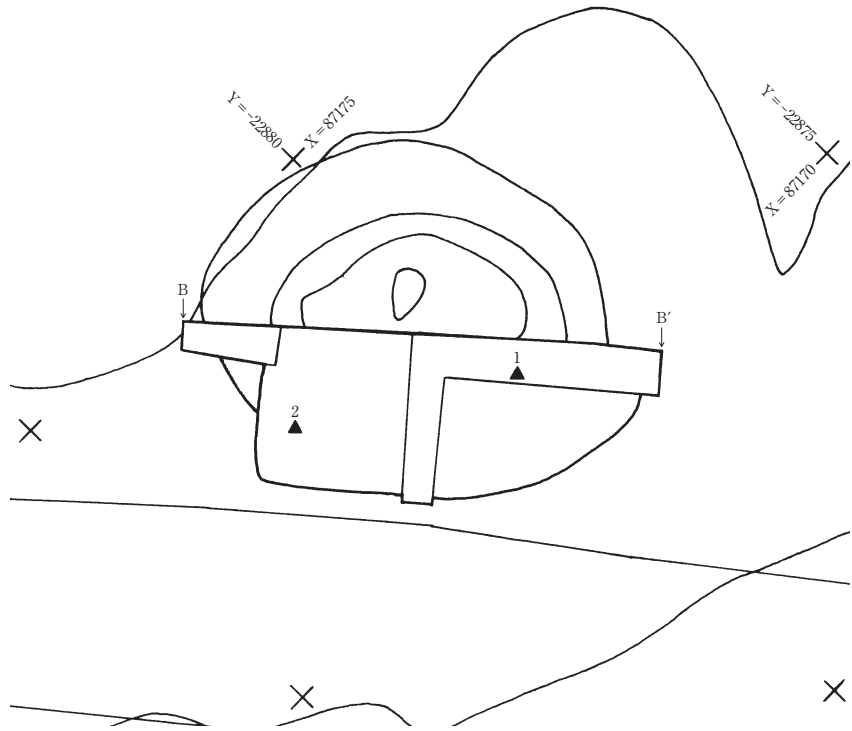


図12 14号塚 調査地

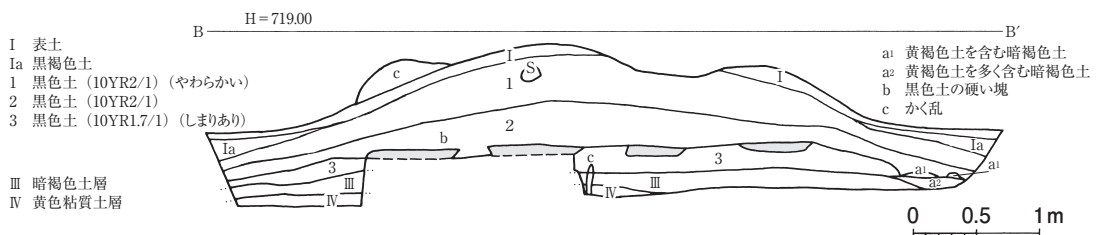


図13 14号塚 土層図

富士二鷹三茄子」の絵柄（富士山、鷹、茄子）を印判であしらっている。

出土状況の撮影後、皿を反してみると皿表面に白っぽい異物が付着していた。蠟のとけたものあるいは供物の可能性も考え、後日分析を依頼した。蛍光X線分析等の結果「陶器片の付着物は土壌由来と考えられる」（吉田生物研究所）とのことであった。

**15号塚**（図9・14、写真13～19）

形状・規模：15号塚は破損部のめだつ北西側半分を調査した。塚はほぼ円形である。塚は路面下に続くようであったが、現用道路であるため路面下の調査は実施しなかった。調査部の径は4.5mある。全体では、およそ5～5.5mになるものと思われる。高さは110cm。

層序（図15）

塚の北東側に、盗掘等によると思われる大きなかく乱部分がみられた。2層内に黒色土の硬い塊（b）が重なるようにみられ、Ⅲ層上面にも部分的に黒色土の硬い面が広がるのを確認した。塚構築時の造作と関係するのではないかと考え、11号、14号の断面を再確認し黒色土の硬い塊（b）が含まれていることを確認した。

出土遺物（図24） 古銭2点、磁器1点（碗）

古銭 図14-1の地点の2層内（黒色土の硬い塊の下）から紹熙元寶（南宋銭：初鑄1190年）（図24-13・写真17）が出土した。当初銭名が読めなかったが、拓本をとって確認できた。少し離れた下部から景祐元寶（北宋銭：初鑄1043年）が1点（図24-14・写真18）出土した。3片に割れていたが接合した。

磁器：江戸末期から近代初頭の碗（茶碗）の小片。笹の葉が描かれる。

**17号塚**（図9・16、写真20～25）

形状・規模：ほぼ円形。調査部の径（推定）6.5mほど、高さ75cm（塚の頂部付近は削平されているので、もう少し高かったと思われる）。

層序（図17）

I層をはいだところ、道路端の塚正面付近に長さ60cm余の大きな川原石が据えられたかのように検出された（写真21）。付近にはみられない大きさの石であり、塚構築当初からのものか留意しながら掘り下げた。石の下に道路面に敷かれた碎石層がみられたので当初からのものでないと判断した。しかし、道路の拡幅あるいは修復などの際、石を移動した可能性も残る。

黒色土の硬い面の広がりを注意して調査し、塚中心部付近に多く広がることが確認できた（写真23・24）。このような硬い面の広がりは、塚構築時に突き固めるようにして盛ったことを示

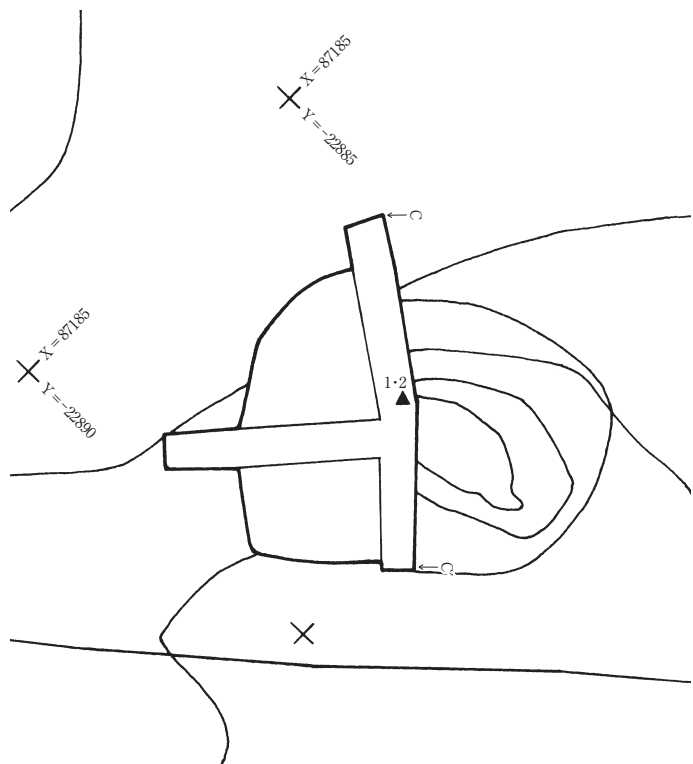


図14 15号塚 調査地

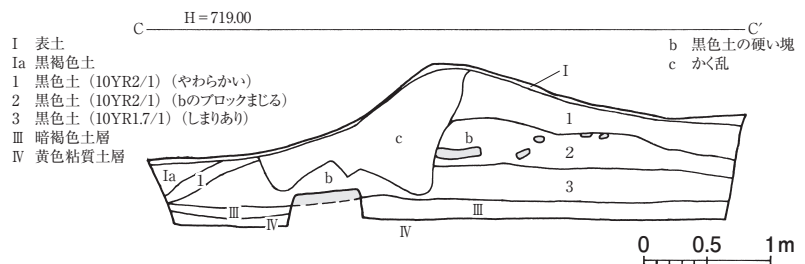


図15 15号塚 土層図

すものではないかと考えた。

出土遺物：陶器 1 点

陶器：薄手の陶器の小片。江戸末期から近代初頭のものが。

注

- 1) 二十塚は飯綱町の大事な遺跡（史跡）の一つであるが、三水村時代を含め、いまだ「史跡」に指定されたことはない。
- 2) 二十塚の調査終了後、宮島史朗氏の案内で両方の塚群とも現存することを確認した。ただし、「虚空蔵山にある塚」は、数基確認できただけである。  
『信濃寶鑑』には、平出の「長家峯」に「數十の圓家あり…」と記されているが、豊野村（現長野市）に所在する塚群である。
- 3) 『三水村の文化財』（1992）に「1基は境を越えて舟岳地籍にある」と記されているように、国土調査が実施される以前は、この塚の位置は信濃町分と考えられていた。

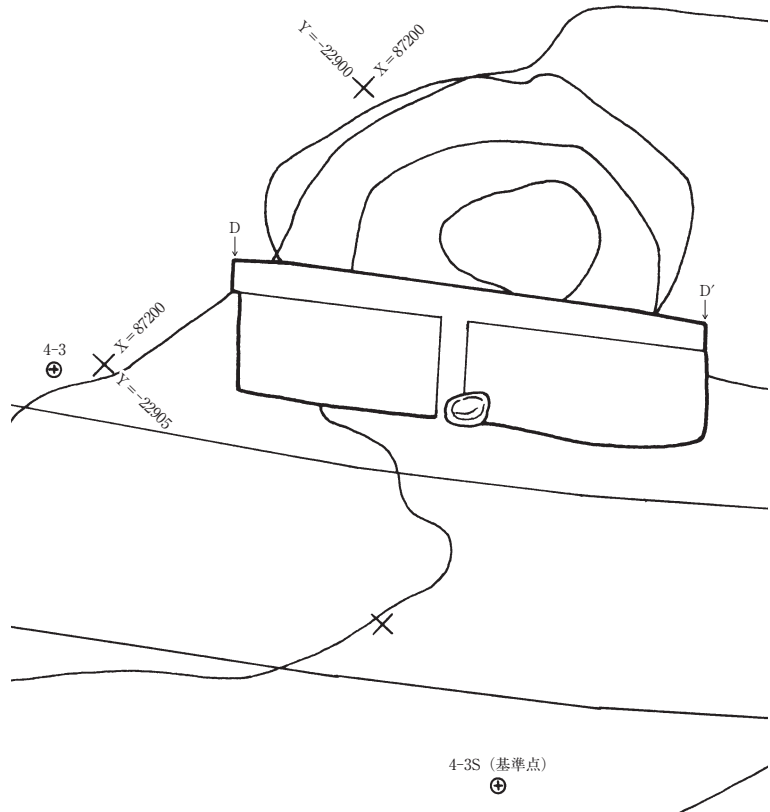


図16 17号塚 調査地

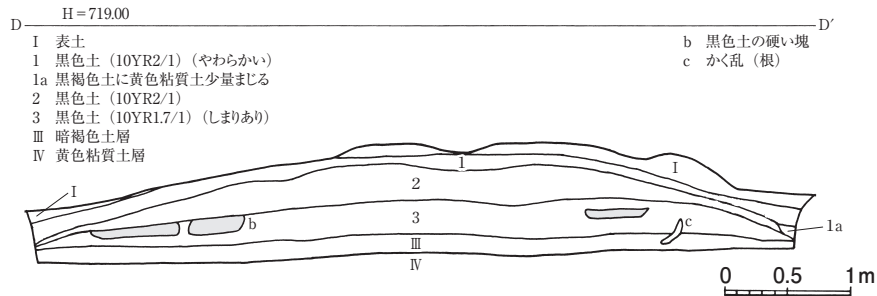


図17 17号塚 土層図

2-2 二十塚 (図2-2)

A 概要

所在地 飯綱町大字芋川字廿塚2158番地

原因 保存目的の範囲確認調査

調査方法 発掘調査

調査期間 平成30年10月17日～11月7日

調査面積 約40㎡

出土遺構 塚2基 (12号・13号)、落とし穴状遺構1 (13号塚の下)

遺物 12号 カワラケ1点、陶器5点、磁器3点

13号 須恵器1点、土師器1点、カワラケ1点、内耳鍋（焙烙）1点、陶器1点、磁器4点、鉄釘1点、不明鉄製品1点、砥石1点、石鏃1点、黒曜石片3点、石皿1点、旧石器1点。

## B 2次調査の経緯と概要

破損した塚の裾部分の修復に合わせ実施した7月の調査で、塚が中世に築かれた可能性があること、塚の構築にあたって突き固めたと思われる部分が存在すること、旧石器時代の遺跡と重複している可能性があることなど知ることができた。

これらをさらにはっきりさせるため、保存目的の範囲確認調査として12号塚・13号塚の発掘調査を実施した<sup>(1)</sup>。旧状を復旧する目安とする目的もあって、塚の中央部を十字形に残し、4分割して調査することとした。あわせて、土層の変化をつかむには作業員が入れ替わらないほうが良いだろうと考えて、区画内は1名の作業員が継続して担当することとした。分担区画のみ先行しないよう相互に状況を確認しながら発掘するように努めた。

その結果、1次調査で確認したブロック状の硬い面は、木の根やネズミ等の穴で壊されている部分も多いものの、層をなして重なっていることを確認することができた。遺物も13号塚を中心に、内耳鍋（焙烙）、カワラケ、砥石、石鏃、旧石器等、塚構築時以前のものも含めかなり検出できた。特に焙烙は、塚構築時期を限定する可能性があり注目される。

## C 2次調査結果

### 12号塚（図9・18、写真26～35、48）

形状・規模：ほぼ円形。径6m、高さ85cm。道路側の塚裾部分は路面下に延びているようである。

層序（図19-1・19-2）

I層をはいだところ、17号塚同様に道路端の塚正面付近に長さ63cm余の大きな川原石が検出された。ここも、塚構築当初からのものか留意しながら掘り下げたが、石の下に道路面に敷かれた碎石層がみられたので当初からのものでないと判断した。2つの塚でこのような大きな石が据えられた経過についてはさらに検討を要しよう。

塚はⅢ層を削り、5層より上層を盛りあげたものと思われる。5層はよく締まっており、1次調査で「ブロック状の硬い面」としたものが層をなして広がっていた。4層・3層も同様によく締まっていた。2層には、硬い塊がブロック状に混じる。塚の頂部下は（腐食した）切株の影響を受けており表層が入り込んでいた。

出土遺物：土師器1点、陶器5点、磁器3点

いずれも小片で図示できるものはなかった。土師器を除き、近現代の陶磁器と思われる。

### 13号塚（図9・20、写真36～48）

形状・規模：ほぼ円形。径7.5m、高さ115cm。塚の下からは縄文時代の落とし穴状遺構が検出された。また、旧石器も出土しており、後年これらの遺跡の上に塚が築かれたことがわかる。

層序（図21-1・21-2）

塚が高かったこともあり、硬い面が層をなして重なる状況が良く確認できた。13号塚は、Ⅱ層中から構築を始めたようである。その上に黒色土を盛りながらたきしめていったようである。

7層あたりまでは、比較的平坦に積み上げており、いわゆる版築状になっている。その後も3層までよくしまった硬い層が重なる。2層もよ

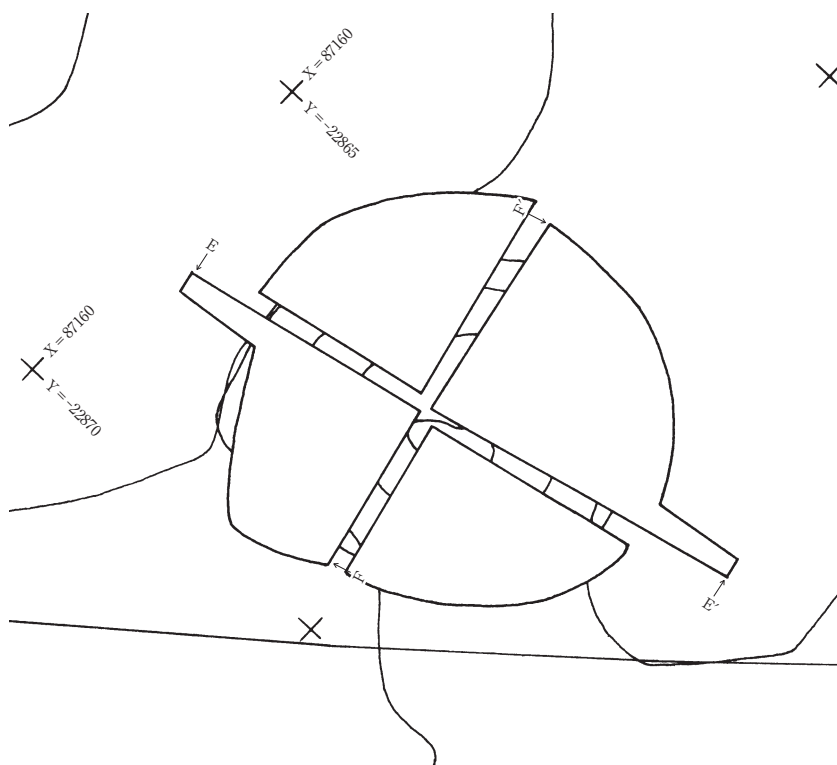


図18 12号塚 調査地

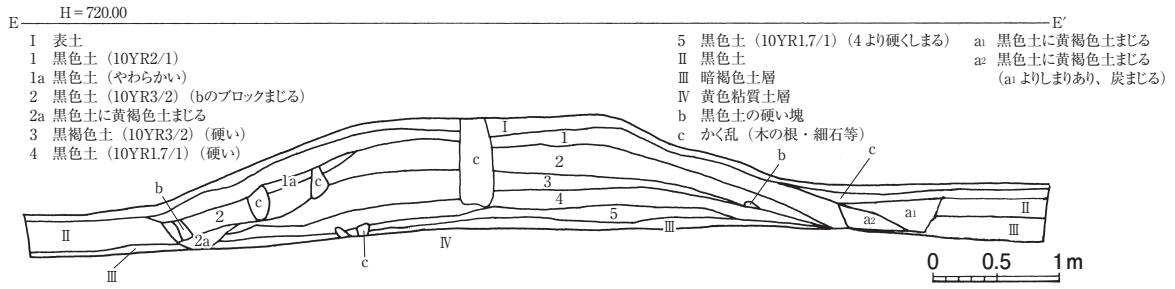


図19-1 12号塚 土層図

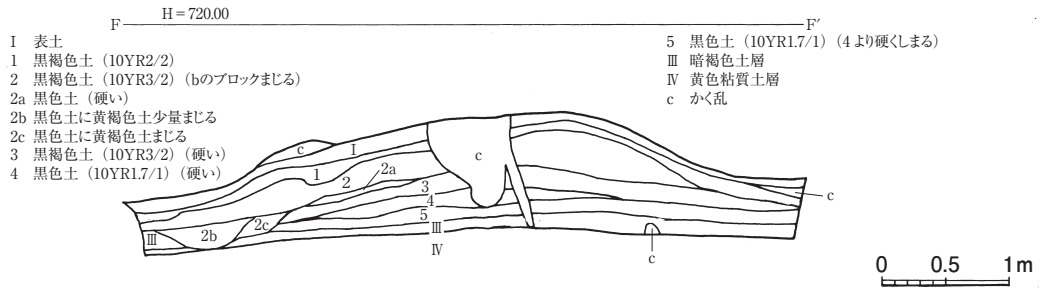


図19-2 12号塚 土層図

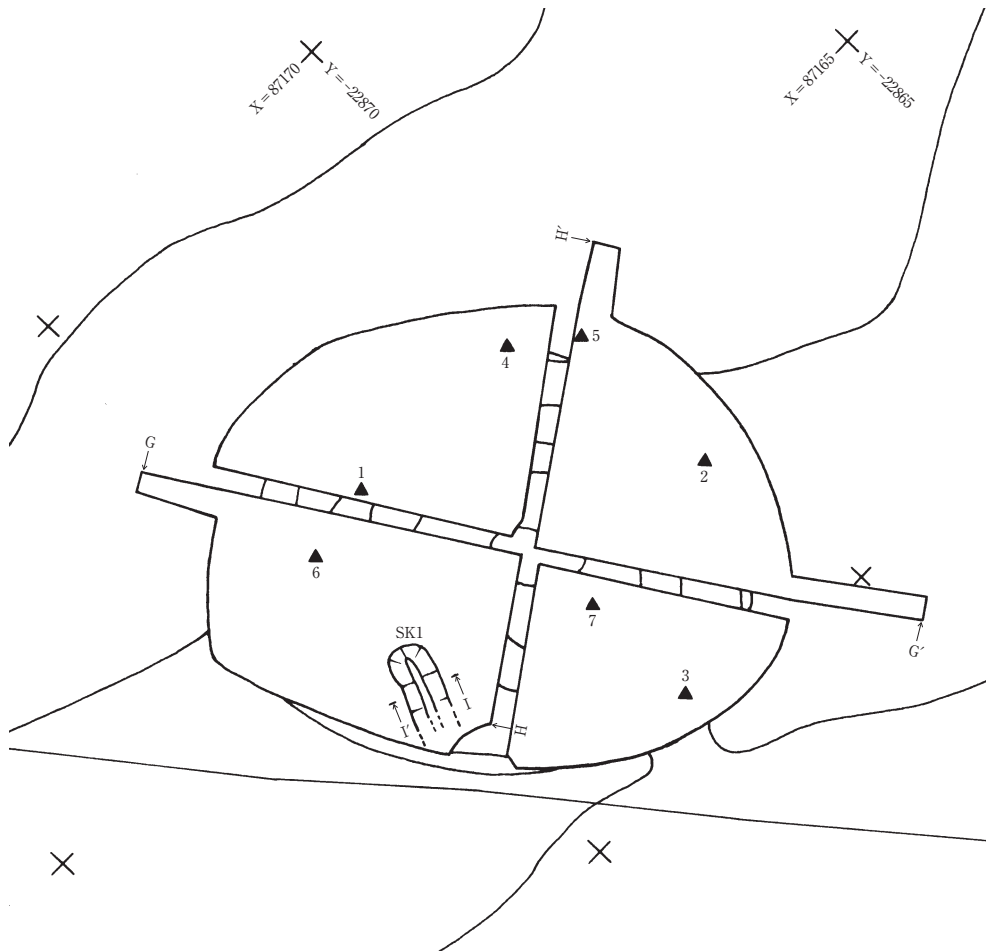


図20 13号塚 調査地

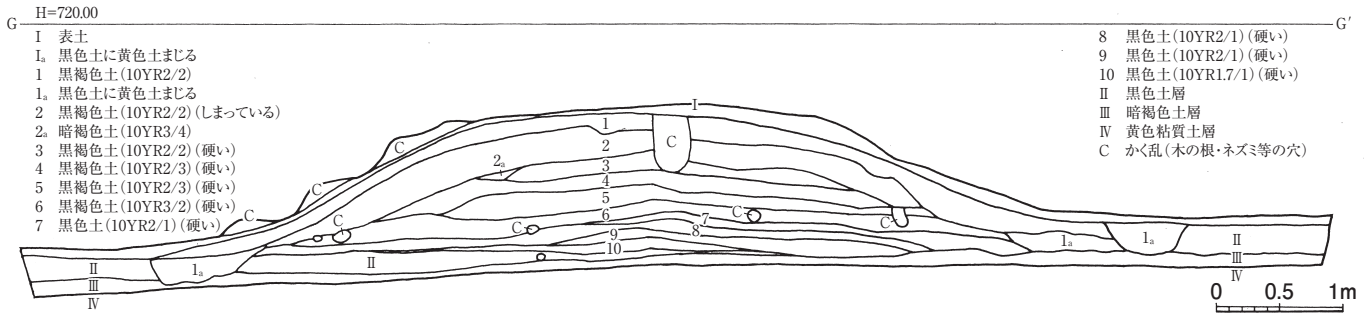


図21-1 13号塚 土層図

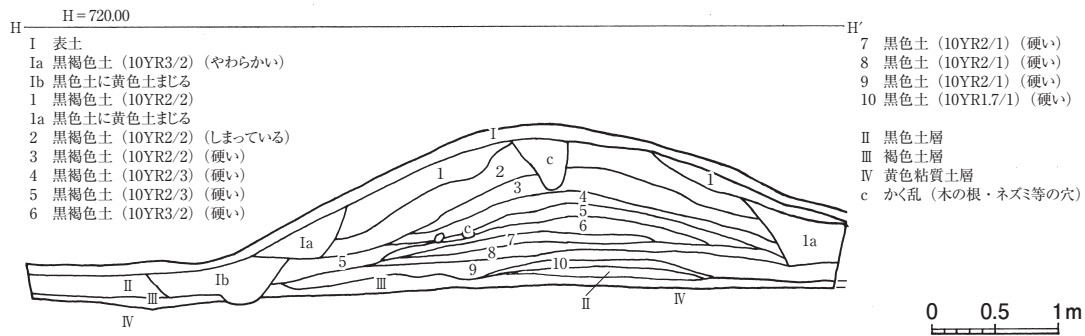


図21-2 13号塚 土層図

くしまっているが、ツヤツヤ・カチカチというほどではない。

この間、各層は10~20cmほどの厚さで重なるが、一様の硬さではなく、各層の表面に近いほど硬くしだいにいくぶん緩くなっていくことを繰り返している。

出土遺物(図24)：須恵器1点、土師器1点、カワラケ1点、内耳鍋(焙烙)1点、陶器2点、磁器4点、鉄釘1点、不明鉄製品1点、砥石1点、石鏃1点、黒曜石片3点、石皿1点、旧石器1点。

内耳鍋(焙烙)(図24-1)の耳の部分が、図20-1地点の2層下部近くで出土した(写真40・41)。径はおおよそ27cmほどに復元できそうである。現存する高さ7cm。胎土は明褐色で、石英などの細かな砂粒を含む。雲母は含まない。外面はナデ調整。環状の耳は幅2cm、厚さ1cmほどである。両端は広がって体部に取り付け丁寧になでている。耳の内側に摩耗痕は確認できない。底は体部に比較して薄い。底部底には、砂粒がついていたかのような小さな凹みが一面にみえる。体部外面の上部には薄く煤が付着している。

県内の内耳鍋の編年研究は小林秀夫氏に始まる。小林氏は、内耳土器(内耳鍋)にはA型(鍋型)、B型(浅鉢型)、C型(ほうろく型)の3種類があり、A型は口縁部が「く」に折れるものから、頸部の直立する器形となるとともに器高も低くなりC型へと(17世紀)と推移することを示した(小林1982)。飯綱町表町遺跡から出土した多くの内耳鍋を検討した笹澤浩氏は、内耳鍋とC型内耳鍋(焙烙)は共存し、16世紀前半、おそくも中葉には焙烙が成立し、両者が並行して使用されていたという(笹澤2014)。

焙烙型の内耳鍋についての研究は、資料数も少ないこともあり論考も少ない状況であるが、17世紀(江戸時代)になるのではないかという見解が多い<sup>(2)</sup>。この内耳鍋(焙烙)が、塚構築時に取り込まれたと考えれば、塚は江戸時代初期から延宝5年(1677)までの間に築かれたことになる。

カワラケ(図24-2)：ロクロ成形されたカワラケである。胎土は黄橙色でごく小さな砂粒を少量含んでいる。図20-7の地点の2層上部から出土している。

磁器は、おちょこ、碗(2)、皿の破片である。皿を除き近世末から近代初頭のものと思われる。このほか、陶器片、須恵器片、土師器片が各1点と出土している。

鉄製品 不明鉄製品 (図23-1)、釘 (図23-2)

不明鉄製品は図20-3の地点の1層内から出土している。環状の部分と取っ手状の部分からなる。轡の銜と遊金にも似ているが、取っ手状の部分は、平らでJ字状になっている。釘は長さ6.4cmほどの角釘である。図20-4の地点の1a層内から出土している。

砥石 (図24-7) : 図20-2の地点の7層上面で出土している。およそ直方体の形を示している。長さ9.7cm、幅7.3cm、厚さ3.4cm。重量513g。石質は凝灰岩系のものと思われる。周囲にすり面がみられる。ただし上端面のすり面はわずかであり欠損後についたのかもしれない。整形のために使用されたと思われる工具の跡が浅く溝状に残る面がある。

石鏃 (図24-5) : 長さ1.8cm、幅1.4cm。手ごろな剥片の周囲を加工して仕上げたようである。図20-5地点のIV層表面から出土している。石材ははっきりしないが、頁岩系のものか。重さ0.6g。

石皿 (図24-8) : 大型の石皿と思われるが、破片のため長さ (現況12.4cm)、幅 (現況10.9cm) と不明。安山岩系の石ですり面は浅い。道路際のI層内から出土している。

旧石器 (図24-6) : 長さ11.6cm、幅2.8cmの縦長剥片。図20-6地点のIV層 (黄色粘質土層) に刺さるようにして出土した。周囲に小さな剥離がみられる。頁岩系の石で重さ35.1g。

石鏃、石皿などととも、二十塚周辺は縄文時代および旧石器時代の遺跡も存在することを示すものと思われる。

SK1 (図22・写真46・47)

13号塚の下に、落とし穴状の遺構を検出した。道路面下に広がるようで全体の形状はつかめなかったが、長さ125cm以上、幅27cm、深さ110cmの細長い遺構である。表町遺跡 (図1-62) でも、類似した「陥し穴」が多数検出されている (中野2009)。遺物は出土しなかった。

### 注

- 1号墳およびその東に位置した可能性のある地点も発掘対象に考えたが、地主さんの了解を得るまでの過程で手間取り断念した。
- 「内耳鍋から焙烙へ」で近世江戸在地系焙烙の成立について論じた両角まり氏の分類では、本資料はB群Ⅲ類aに類似する。地域も異なり比較することに躊躇するが、「(B群)Ⅲ類aと(丸底の)Ⅲ類bは共存し、1590年代から1600年代に位置付けられよう」(両角1,996)と記している。  
市川隆之氏と原明芳氏からは「江戸時代のもの」、さらに市川氏は「内耳が底に着いていないので18世紀にはくだらない」と教示いただいた。

### D まとめ

#### (1) 二十塚の全体像

現状で21の塚状の高まりを確認し、全体図 (500分の1) および個々の塚実測図 (100分の1) を作成できた。今後の遺跡保護や研究の基礎資料となる。

#### (2) 構造と築造年代

塚の構造 : 塚周辺の黒色土 (「黒ボク」: 火山灰土) を、盛っては突き固めるという作業を繰り返しているようである。そのため、層の表面近くほど硬い。突き固め方は一様で

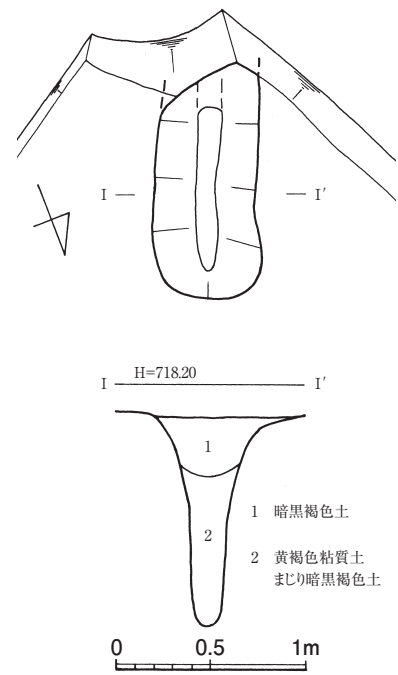


図22 SK1 実測図

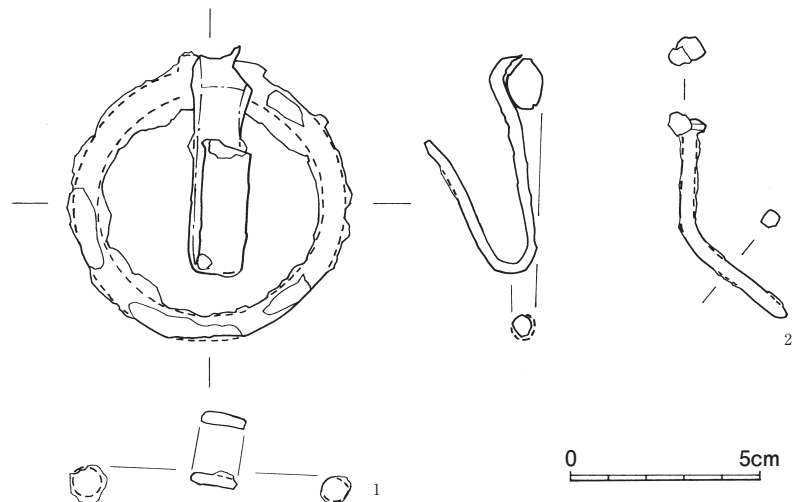


図23 13号塚 出土鉄製品

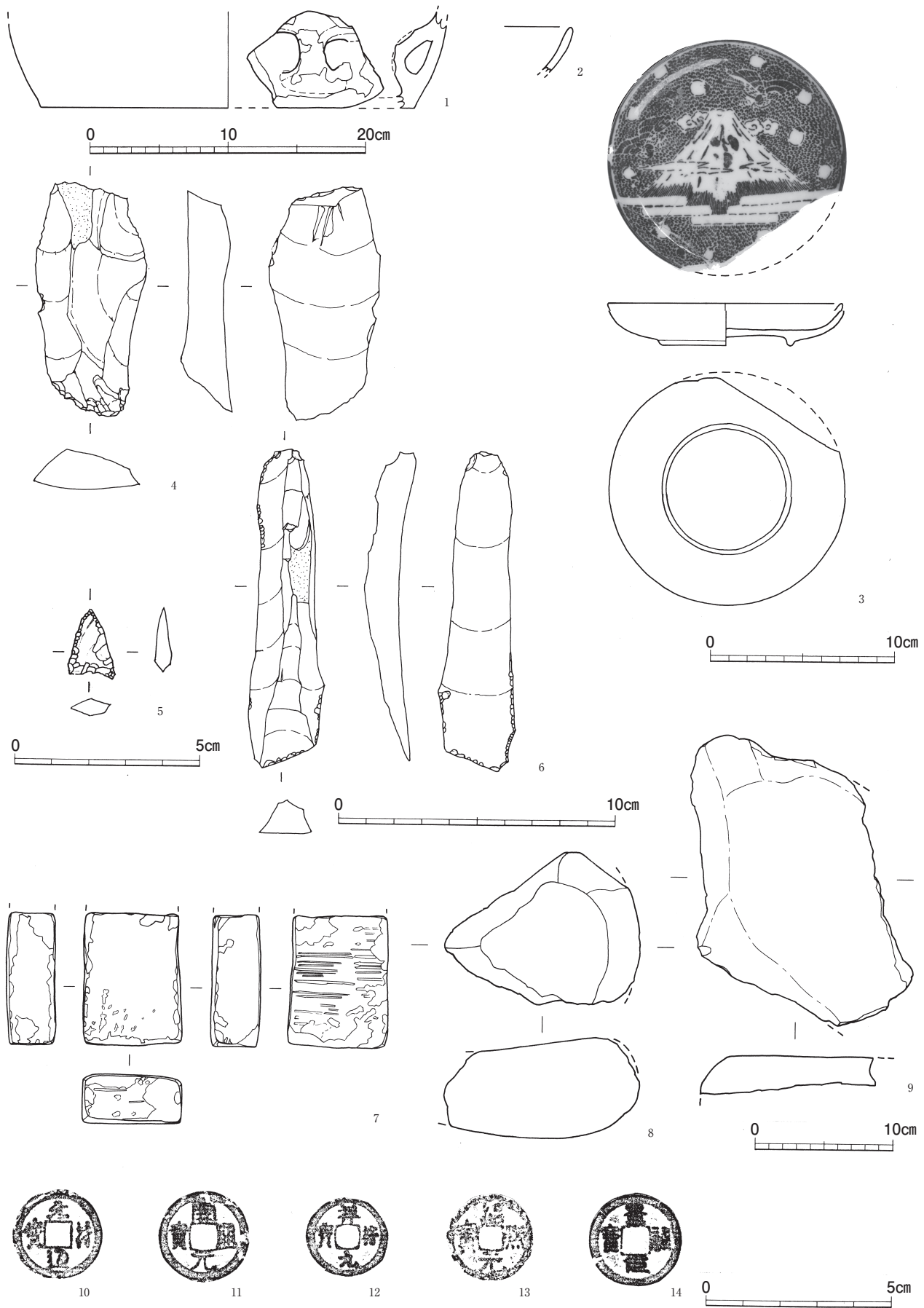


图24 二十塚 出土遺物



はないが、全体に丁寧で上面が黒光りする層もみられる。

手順としては、塚の端部でⅢ層あるいはⅡ層を削平して（円）形をつくりだし、その上に周辺に存在する黒色土を盛っているように思われる。

塚の構築方法が共通することは、塚が同一時期に築かれたことを示す可能性が高い。

築造年代：5点の宋銭は、江戸時代初期まで広く流通銭として使用されており、塚の構築年代を考える手がかりとなっても決め手にはなりにくい。焙烙型の内耳鍋が17世紀初頭前後に出現するとするならば、塚の築造年代は絞られることになる。しかし、出土した焙烙型の内耳鍋が、延宝5年以降のものである可能性もあるので類例の蓄積と今後の研究（焙烙の編年を含め）の進展を待ちたい。

今回の調査からは、塚が17世紀初頭から延宝5年（1677）の間につくられた可能性が出てきたと指摘するにとどめたい。

### (3) 塚が築かれた契機となりそうなこと

塚の構築が17世紀初頭から延宝5年（1677）の間であるとするならば、塚の築かれる契機となりそうな出来事がいくつかある。

まず、慶長3年（1598）1月、当地の領主芋川氏が家臣とともに会津に移ってしまうという大変革が起こる。会津移封を命じられた上杉景勝に従ったのである。

その後、関一政が飯山城主となり太閤検地を実施（『飯山市誌』）。慶長5年には森忠政が徳川家康から川中島四郡13万7543石余を与えられ、慶長7年「右近検地」と呼ばれることになる過酷な検地を川中島四郡に実施。芋川村は903石4斗1升の石高となった。

慶長8年、森氏は津山（岡山県）に移封され、松平忠輝が川中島四郡の領主となる（飯山城4万石は付庸大名皆川広照に分けあたえられる）。忠輝は、慶長15年に越後福島城（上越市）に移封。川中島四郡と合わせ約60万石を領する。飯山城4万石には堀直寄が入るが、元和2年（1616）越後長岡に移封。同年佐久間氏領となる。佐久間氏は寛永16年（1639）に所領を没収され、同年3月松平忠俱が飯山藩主となるなど、わずかな期間に、たびたび領主が交代した。

領主の度重なる交代は、地域の不安定要素を増す要因となったものと思われる。塚は地域の安定を願う心が築かせたものではなからうか。

松平忠俱は、元禄9年（1696）に63歳で没するまで58年間「飯山領政にいちじるしい治績」（『飯山市誌』）をあげたといわれ、地域はようやく安定したのである。

二十塚の謎は残ったままであるが、いくぶん手がかりをつかめたようにも思われる。今回調査した塚もすべて掘りつくしたわけではないので、今後の検証も可能である。いつの日か明確な築造時期や目的が解明されることを願ってまとめとしたい。

## 3-1 上赤塩遺跡（図2-3）

### A 概要

所在地	飯綱町大字赤塩境ノ峯798番地、799-1番地 北緯 36° 45' 18" 東経138° 16' 51"
原因	個人住宅兼店舗建設
調査方法	試掘調査
調査期間	平成30年5月8日～11日
調査面積	175.7㎡
出土遺構	住居跡状遺構1、土擴状遺構（数基）、柱穴状遺構（10数か所）
遺物	縄文中期土器片・石器片 保存箱2箱程度

## B 調査の経緯と遺跡の概要 (図25)

調査地は文化財保護法に定める「周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)」にあたる上赤塩遺跡(図1-161)に含まれる。遺跡中央附近に個人住宅兼店舗の建設が計画されたため、試掘調査を実施した。

上赤塩遺跡は、飯綱町大字赤塩の字境ノ峯、字西原に所在するが、古くから「上赤塩遺跡」として知られてきたため『飯綱町遺跡詳細分布調査報告書』でも上赤塩遺跡と表記している。

遺跡は北西側を流れる斑尾川に向かってはり出す台地に位置する。台地の最高地点は530.9mで、530mの等高線が東西100m、南北130mの範囲を囲む。東西および南方向はゆるく傾斜しているが、斑尾川が流れる北西側は486m前後の河床面まで急な傾斜となっている。

台地の中央部は腐植土の堆積が少なく、耕作土(15~20cm)下はわずか数cmで黄褐色粘土質土(いわゆるローム層)に達してしまう。このため遺構も耕作の影響を受けている。

上赤塩遺跡は『信濃史料』第1巻(1956年)に「(縄)打石斧」の出土が記されているのが初出の遺跡である。1960年7月には神田五六氏によって西原772番地の調査が行われている。1967年にも北部高校による調査も行われているが、ともに報告書は未刊である。

1970年小林孚氏は『長野』に「上水内郡三水村上赤塩遺跡」を紹介。遺跡の景観を「常々あの八ヶ岳山麓のミニチュアだとかんがえている」と述べ、地元の永野五六氏の採集された遺物について「赤塩遺跡にて採集される遺物はその大部分が中期縄文文化時代に属するものである。そして遺物のもつバラエティーも実に豊富で土器はもちろん、土偶・石棒・石皿・磨石・凹石と中期縄文文化人の日常生活に欠くことのできぬと従来考えられてきた生活器具・特殊な製品はひとつおとりそなわっている」と記している。小林氏は『上水内郡誌』(1976)の中でも「三水・赤塩」出土の土器17点を写真紹介している。後に「斜行沈線文土器」と称されるようになる一群の土器が多くみられた。1979年には大久保邦彦氏が上赤塩遺跡出土の縄文中期中葉の深鉢形土器を紹介している。

このようにして上赤塩遺跡は知られるようになってきたが、その全体像は明らかではなかった。

1991年「斜行沈線文土器」の位置付けを追及していた寺内隆夫氏によって、永野氏採集資料のうち「縄文中期前葉から中葉の土器に絞って報告」が行われた。上赤塩遺跡の土器群が詳細に分析され、その特徴が明らかにされることとなった。

寺内氏の報告によると、上赤塩遺跡の土器群の特徴を大きくとらえると「中期前葉では五領ケ台Ⅱ式に並行する段階から資料の増加が認められ」、「広い地域の土器の特徴を取り入れて在地化させており、排他性は少ない」こと。さらに「中期中葉に入っても、土器の出土量は衰えず、集落が安定した状態で継続されていたことが予想」されること。土器の様相からは「他地域との交通を保ちながらも、北陸系と中部高地系の綱引きの中から在地性を強めていくように見受けられる」といった点を指摘されている。

また、それぞれの時期の土器の特徴として、中期前葉には、千曲川・犀川地域の土器、在地性の強い土器(深沢タイプと称される土器など)、もっとも強い影響を受けたもののひとつとしての北陸系土器、関東地方の影響を受けた土器、分水嶺から南側の中部高地~西関東にかけての土器(影響はわずか)が存在すること。

中期中葉初頭(上赤塩4期)になると、分水嶺以南の影響が強まってくる。もっとも顕著には、斜行沈線文土器に見られる横位楕円区画文を採用すること。その他の基本となる装飾要素は、依然北陸系の土器と共通するものが多いこと。

上赤塩5期以降になると、区画文をはじめとする器面の分割、区画化の影響がなくなり横方向に流れる渦巻文が

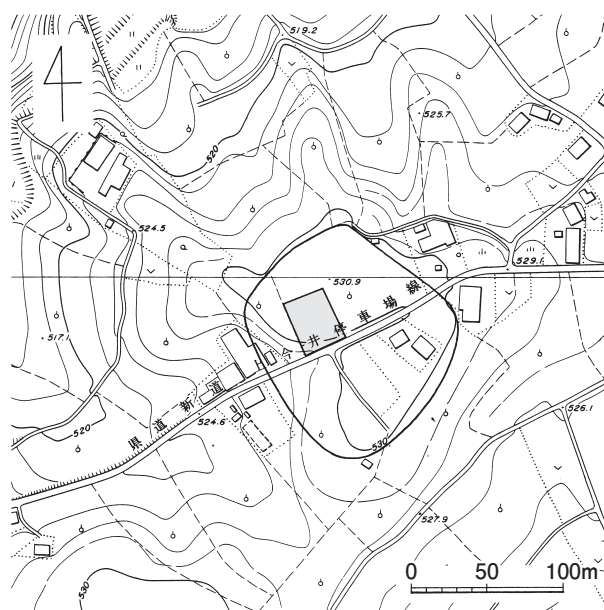


図25 上赤塩遺跡 範囲と調査地

主装飾となっていく（分水嶺以南の区画重視の土器に対する差異の強調）こと。上山田、天神山式や火炎型土器といった日本海側の土器と共通した理念に支えられていること。小地域（上赤塩遺跡周辺地域）の独自性（上赤塩Ⅲ群5墨一焼町土器に並行する土器）がみられることを指摘された。

1995年には、遺跡内を通過している県道の拡幅に際して発掘調査が実施され13棟の住居跡等が出土した。調査者は「限られた調査範囲であったが、遺跡の中央部をほぼ横断するトレンチを掘った形になった。遺構の分布をみると13軒の住居址は東西に分かれ、その内側に土坑群が分布し、さらに内側は遺構も遺物もみられない区域となる」。住居が台地の周縁部によって弧状に分布し、その内側に土坑群が分布し、中央部に広場を持つかなり規模の大きな集落の存在が予想される」と記している。出土遺物については、中期前葉を主として中葉にかけての地元の土器が多いこと、土偶の製作方法（「ほぞ・ほぞ穴」方式）が北信濃から北陸方面に特徴的な技法として存在する可能性のあることなどを指摘している（小柳1997）。

### C 調査結果（図26、写真49・50）

調査地は、1995年の県道拡幅に伴う調査区の北側に接して位置していた。報告書で「中央部に広場を持つかなり規模の大きな集落の存在」が予想されたが、まさしくその中央部と目される地点であった。このため、その検証もかねて6か所にトレンチを設定した。

はじめに、用地の西端に長さ30m、幅1.1mのトレンチを設定した（T1）。重機で順次削平していったところ、県道に近い部分を除き地表下20～25cm程度で黄色粘質土層（ローム層）に達した。黄色粘質土層（ローム層）面にも耕作の影響によると思われる攪乱部分がみられた。

西南の隅で住居跡状の落ち込み検出したほか、土壇状の落ち込み、柱穴状の落ち込みを確認した。

T2は、T1から8mほど東に設定した。

長さ29.8m、幅1.1mの規模となった。重機で順次削平し、20～25cm程度で黄色粘質土層（ローム層）に達した。トレンチ北よりで土壇状の落ち込みを確認した。

T3は、T2から8mほど東に設定した。

長さ28.5m、幅1.1mの規模となった。重機で順次削平し、20～25cm程度で黄色粘質土層（ローム層）に達した。黄色粘質土層（ローム層）面にも耕作の影響によると思われる攪乱部分がみられた。トレンチ中央付近で柱穴状の落ち込みを確認した。

T4は、T3から8mほど東に設定した。

長さ26.5m、幅1.1mの規模となった。重機で順次削平し、20～25cm程度で黄色粘質土層（ローム層）に達した。遺構は確認できなかった。

遺構は西寄りに多く分布するようなので、T1とT2の間は本発掘時に拡張することとし、他の遺構の広がりを確認するため、T2とT3の間にT5、T3とT4の間にT6を設定した。

T5は、長さ24.4m、幅1.1mの規模となった。重機で順次削平し、20～25cm程度で黄色粘質土層（ローム層）に達した。トレン

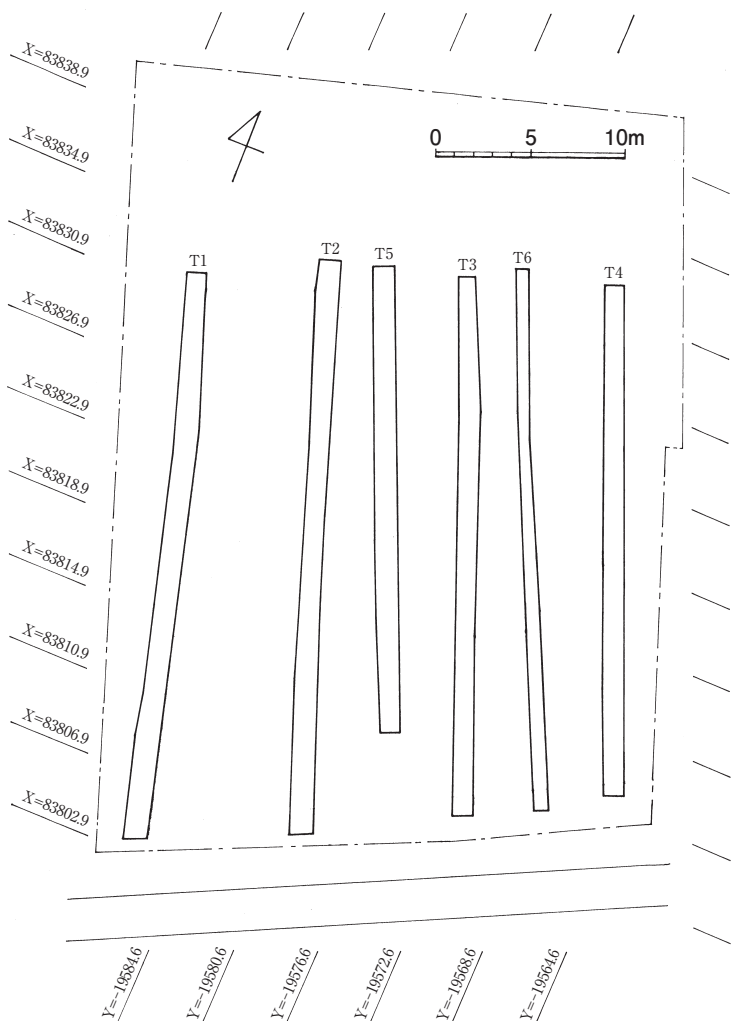


図26 上赤塩遺跡 試掘調査位置図

チ内に柱穴状の落ち込みが散在することを確認した。

T6は、長さ28.5m、幅0.8mの規模となった。重機で順次削平し、20～25cm程度で黄色粘質土層（ローム層）に達した。柱穴状の遺構が散在することを確認した。

検出した落ち込みは、本調査で確認することとし、いったん試掘調査を終了した。

### 3-2 上赤塩遺跡（図2-3）

#### A 概要

所在地 飯綱町大字赤塩境ノ峯798番地、799-1番地

北緯 36° 45' 18"

東経138° 16' 51"

原因 個人住宅兼店舗建設

調査方法 発掘調査

調査期間 平成30年5月14日～6月13日

調査面積 約400㎡（試掘範囲を含む）

出土遺構 住居跡2棟、土壇状遺構10基、柱穴状遺構60、溝状遺構1

遺物 縄文中期土器片（保存収納箱20箱）、土偶、石鎌、打製石斧・磨製石斧・石皿・凹石 等

#### B 調査の経緯と遺跡の概要

試掘調査の結果に基づき、本発掘を実施することとした。調査は遺構の密度の高い部分を中心に拡張したほか、試掘で確認したトレンチ内の落ち込みを掘りこんで遺構の状況を確認した。これによってほぼ工事の影響が及ぶ範囲の状況をつかむことができた。

#### C 調査結果（図27、写真51～57）

測量基準点（T1・T2）の設置とグリッド設定は、株式会社こうそうに委託した。2点の測量基準点座標はネットワーク型RTK法（単点観測法）で求めたもので、T1（X 83816.575 Y -19561.043）（北緯36° 45' 18.7"、東経138° 16' 51.3"）、標高531.516m、T2（X 83792.619 Y -19600.194）（北緯36° 45' 17.9"、東経138° 16' 49.7"）の地点である（測量基準点の数値は、世界測地系2011による）。これを基準に4m間隔のグリッドを設定した。

T1地点の標高点（県境界杭上：標高531.516m）については、地形図の数値と照らし合わせると疑問もあるが、現段階では確認できずこの数値を利用している。

層序は、試掘時の所見と同様でⅠ層（表土・耕作土）下に部分的にⅡ層（褐色土層）が残るものの薄く、現地表下20～25cm程度でⅢ層（黄色粘質土層・ローム層）に達する。遺構の多くはⅢ層へのⅡ層の落ち込みとして確認されている。

遺構 住居跡2棟（写真56）、土壇状遺構10基（写真55）、柱穴状遺構60か所、溝状遺構（写真57）1か所を検出した。

住居跡は、西南隅に2棟切りあう形で検出した。土壇や柱穴状の遺構の分布も遺跡の西側に集中する傾向がみられた。中央部に遺構・遺物が少ない傾向も確認できた。

遺物 住居跡および溝状遺構の周辺から集中して出土した。縄文中期の土器片のほか、土偶、石鎌、打製石斧・磨製石斧、石皿（周囲に線刻を持つものあり：写真53）・凹石等の石器も出土している。このうち土器は摩滅しているものが目立った。包含層が薄く耕作等の影響を受けているためかと思われる。このほか、柱穴状の遺構（P37）から、ドングリ類の実が出土している。

なお、遺物の整理が進んでいないため、詳細な報告は次年度を期することとする。

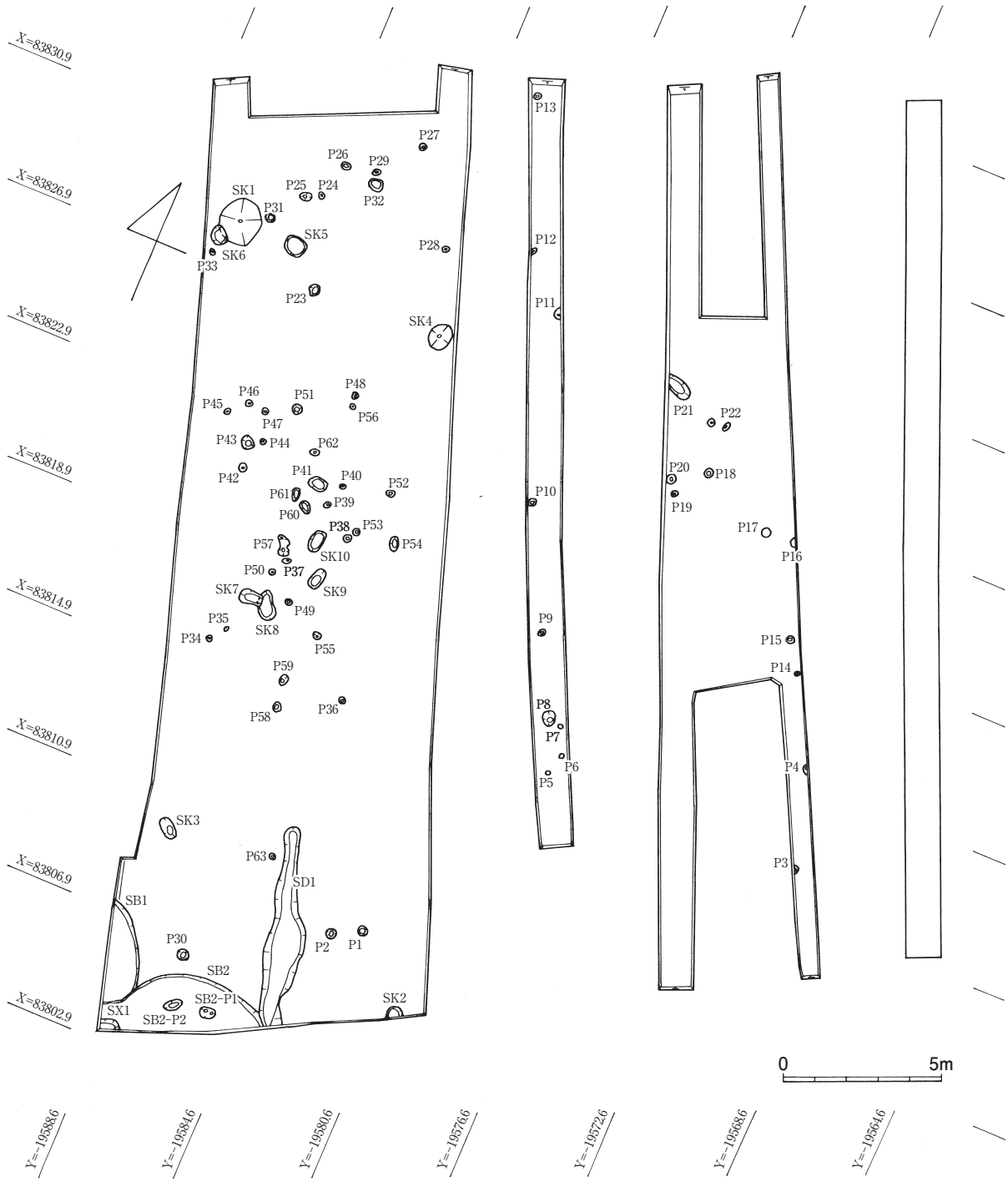


図27 上赤塩遺跡 遺構全体図

### 3-3 上赤塩遺跡 (図2-3)

#### A 概要

所在地 飯綱町大字赤塩境ノ峯799-2番地  
 北緯 36° 45' 18.4"  
 東経138° 16' 50.5"  
 原因 個人住宅兼店舗建設  
 調査方法 試掘調査

調査期間 平成30年10月15日  
 調査面積 10.8㎡  
 出土遺構 なし  
 遺物 縄文中期土器片 数点

## B 調査の経緯

先に調査を実施した（3-1、3-2参照）住宅兼店舗建設予定地への県道からの進入路部分は、県有地（県道敷）になるため、別途許可を待って発掘調査を実施した。

## C 調査結果（図28、写真58）

これまでの調査で、包含層が薄いことが予想されたため重機は使用せず、手掘りで対応した。

調査地点でも20～25cm程度で黄色粘質土層（ローム層）に達した。耕作の影響を受けていることに加え、道路建設に伴うと思われるかく乱部分が多く、包含層を確認できなかった。遺構も検出できなかった。黄色粘質土層（ローム層）も10cmほど掘り進めたが遺物の検出はできなかった。

予定された工事に伴う遺跡への影響はないと判断し、調査を終了した。

## 4 大日影遺跡（図2-4）

### A 概要

所在地 飯綱町大字豊野字宮下5014-7番地  
 北緯 36° 74' 83"  
 東経138° 24' 59"  
 原因 個人住宅建設  
 調査方法 試掘調査  
 調査期間 平成30年8月2日  
 調査面積 8.7㎡  
 出土遺構・遺物 なし

### B 調査の経緯と遺跡の概要（図29）

調査地は文化財保護法に定める「周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）」にあたる大日影遺跡（図1-69）に含まれる。遺跡南東端附近に個人住宅の建設が計画されたため、試掘調査を実施した。

大日影遺跡は、鳥居川の右岸（南）の高台に位置し、南東には宮の下遺跡（70）、大久保遺跡（71）、が、南西には東前坂遺跡（64）、東原遺跡（65）がある。

遺跡は『牟礼村遺跡詳細分布調査書』（牟礼村教委2000）によって周知されたもので、分布調査によって、石鏃、縄文土器片・土師器、須恵器等の遺物が採集されている。

### C 調査結果（図30、写真59・60）

遺跡の範囲に含まれる駐車場部分（約35㎡）の多くは、既に削平され駐車場として利用されていた。このため、両脇に旧地表面を残すだけであったが1本のトレンチ（T1）を設け、重機によって順次削平していった。旧状をとどめる部分の層序はI層（表土・耕作土）（20



図28 上赤塩遺跡 県道進入路部分調査

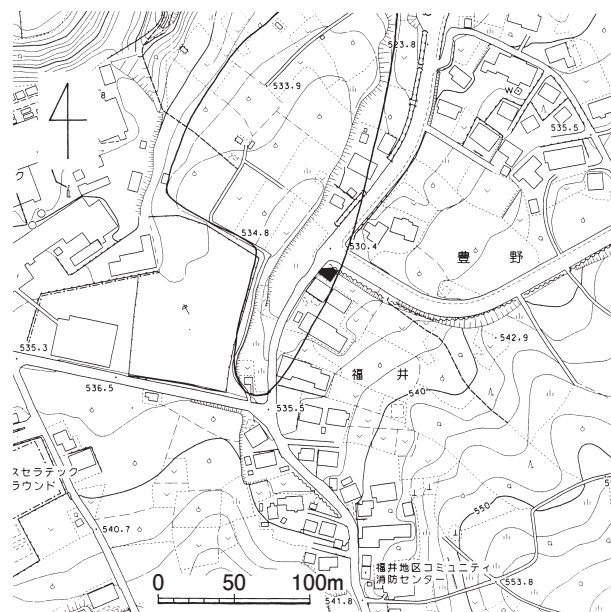


図29 大日影遺跡 範囲と調査地

cm程)、Ⅱ層(軽石を含む黒褐色土層)(10cm)、Ⅲ層(礫混じり粘質土質)(40cm以上)となっている。遺構・遺物の検出はできなかった。

工事は遺跡に大きな影響を与えないと判断し調査を終了した。

## 5 七割遺跡 (図2-5)

### A 概要

所在地 飯綱町大字牟礼字七割2100番地

北緯 36° 74' 46"

東経 138° 23' 49"

原因 個人住宅建設

調査方法 試掘調査

調査期間 平成30年10月15日

調査面積 22㎡

出土遺構 井戸状遺構1、柱穴2

遺物 土師器6点、磁器1点

### B 調査の経緯と遺跡の概要 (図31)

調査地は文化財保護法に定める「周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)」にあたる七割遺跡(図1-61)に含まれる。遺跡南端附近に個人住宅の建設(約56㎡)が計画された。計画では、掘削は現地地表下30cmにとどまるため、調査は地表下60cmをめどに実施することとした。

七割遺跡は、三登山から北に傾斜する斜面の先端部に位置する。北には矢筒城館跡(60)、東には表町遺跡(62)が広がる。

遺跡は『農業振興等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書一昭和45年度』(長野県1971)で周知され「矢筒山西側に所在し、水田耕作の折に国分期坏10枚が出土した」と記載されている。『牟礼村遺跡詳細分布調査書』(牟礼村教委2000)には「縄文・平安・中世」等の遺物が採集されおり、備考欄に「石ヒ・土師器・須恵器・珠洲焼など表採」と記載されている。

平成25年度に実施した東方約100m地点の試掘調査では、地表下55cmで中世の土壌と遺物を検出している(小柳2017)。平成28年・29年に実施した試掘調査及び工事立ち合い地点においては遺構・遺物とも検出されていない(小柳2018)。遺跡の実態は不明な点が多い。

### C 調査結果 (図32、写真61~65)

建設予定地北側にトレンチ(T1)を設け、重機によって順次削平していった。層序はⅠ層(表土:耕作土)(10cm)、Ⅱ層(暗茶褐色土)(20cm)、Ⅲ層(明褐色土層)(50cm以上)となる。Ⅲ層上面で円形の落ち込みを検出した。遺構の性格を確認するため掘り下げ、井戸状の遺構(写真63)になることを確認した。深部への掘り下げは実施していない。

井戸状遺構が検出されたので、遺構の広がりを確認するためT2・T3を設けた。T1とT3の交わる付近のⅢ層上面で柱穴状の遺構(写真64)を2か所検出している。遺物は土師器の小片6点、磁器1点が出土している。工事による削平部は浅く、遺構に大きな影響を与えないと判断し調査を終了した。

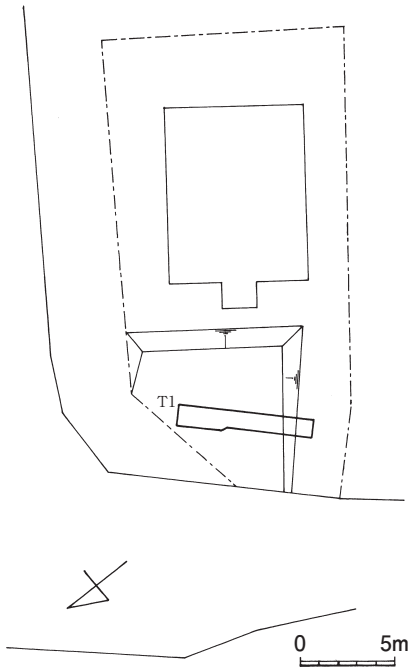


図30 大日影遺跡 調査位置図

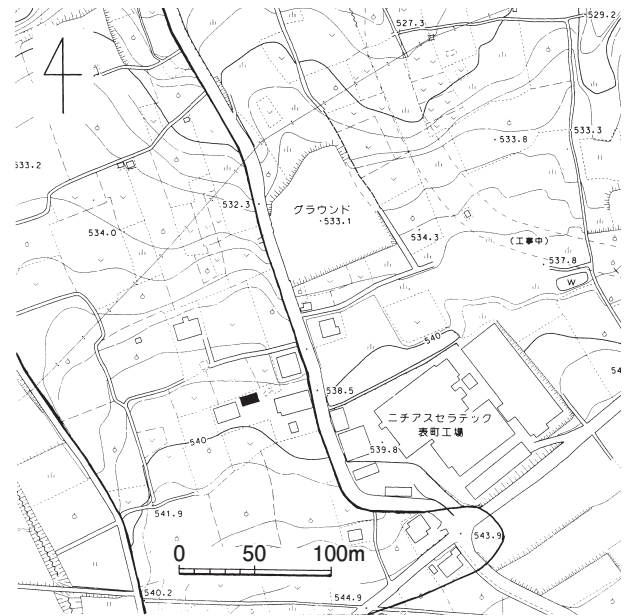


図31 七割遺跡 範囲と調査地

## 6 鼻見城跡 (図2-6)

### A 概要

所在地 飯綱町大字芋川字町  
 浦802番地  
 北緯 36° 77' 59"  
 東経138° 24' 87"  
 原因 景観施設設置工事  
 調査方法 試掘調査  
 調査期間 平成30年10月16日  
 調査面積 9㎡  
 出土遺構・遺物 なし

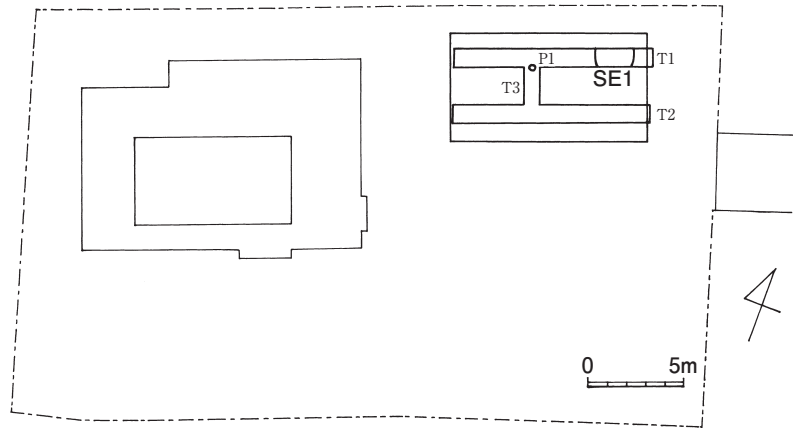


図32 七割遺跡 調査位置図

### B 調査の経緯と遺跡の概要 (図33)

調査地は、文化財保護法に定める「周知の埋蔵文化財包蔵地 (遺跡)」にあたる鼻見城跡 (図1-193) に該当する。この本丸と想定される平坦面に、<sup>あずまや</sup>四阿の建設が計画された。遺跡への影響を少なくするため担当課と協議し、以前建設されていた場所に再建することとした。なお、これまで城跡の発掘調査が実施されておらず状況も十分把握されていないので、今後の遺跡保存に資するため基礎部分全面を発掘することとした。

鼻見城跡は「芋川寺村の北方、標高722.7mの鼻見城山頂に構築した山城である。本郭は東端の最高所に設けてあって、東西50m、南北13mの長方形をなし、土塁の跡はなく平坦である。本郭の北約6m下に幅7~16mの脇郭、本郭の西に堀切を隔てて、本郭とほぼ同大の二の郭があり、本郭南から続く段郭が二の郭の脇に続く。この城は比較的単純であるが、南下に芋川氏の館跡があり、その両方を町と称していて、平安時代に設置された芋川庄の庄司の跡と考えられる。芋川氏の要害城であったことを示しているえがたい史跡である」(『三水村の文化財』)と記されている。

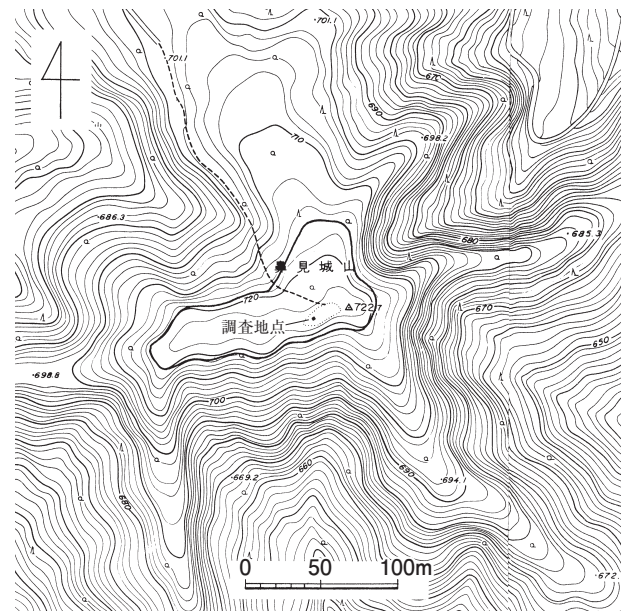


図33 鼻見城跡 範囲と調査地

遠藤公洋氏は近年の研究成果をまとめ、鼻見城跡の城館跡の特徴として以下の点を指摘している (遠藤2018)。

- ・「自然の地山がかたちづく利用可能な平坦面と急な斜面を生かした城館跡である。北西尾根続きをどのように切断したかは不明だが、南に対しては主稜線を城壁に見立てて枡形と門を構えている。遺構中心部の規模に比べて大がかりな出入りの構造から、防御性とは別の意味で相応の門を構える必要がある城だった可能性が浮かびあがる。また、平場Iはよく水平に造成され、一定の時間をかけて維持管理された様相も浮かびあがる」
- ・「明瞭な遺構は、東西に長い主稜線付近に集中している。ただし、山頂付近では、北西に延びる幅広い尾根Aに明瞭な切断箇所を見出せず、この尾根上に想像以上に広い空間を確保していた可能性も否定できない」
- ・「東西に長い稜線を中央付近の堀切Bによって断ち切った構造で、堀切東側の平場Iがより広く、標高も若干高いので、ここが城の中心と考えられてきたようである。何かを囲い込もうとする土塁や塁線はなく、一見するとあまり構造上の工夫がない単純な城のように見える。しかし、丁寧に観察すると、堀切南側の空間Dは、緩い勾配があるが東西への移動を遮られた枡形状の空間と評価できる (写真あり・略)。これらのことから、中央の堀切Bは主稜線の東西移動を遮断するねらい以上に、南側の谷 (下方が「町」地籍) から登ってきた者を迎える導



入路（門）の役割が大きいと評価すべきであろう。このような堀切を用いた門の類例は、近隣では壁田城（中野市）や須田城（須坂市）に見出すことができ、北信濃の城の一部でこのような構造が用いられていたことがわかる。基壇Cはここに置かれた櫓門のような建造物の痕跡であろう。そうすると、主稜線上の平場ⅠとⅡは、南側に対する大きな防壁となり、より安全かつ重要な空間は、北側の平場Ⅲであった可能性が浮かび上がる。もし、平場Ⅰが最も重要な空間だとするならば、平場Ⅲから平場Ⅰに上がる道筋が必要だが、平場Ⅰの北端を回り込むルートに本来の城道だと積極的に評価する材料は見出せず、今後の課題である」

・「鼻見城跡は山頂部の稜線を堀切で二分する以外は明瞭な堀もなく、工夫された防御遺構は見出せない。ただし、平場は水平に造成され、一定の時間をかけて普請や管理が継続された様相がうかがえる。しかも、枡形状の空間や基壇を据えた門の設定に注目すれば、鼻見城がそのような門構えを必要とする使い方をされたと考える必要がある。この事実と、山麓の芋川氏館跡の発掘成果を重視すれば、国人芋川氏の本拠は鼻見城跡とその山麓一帯と考えるのが一番無理がないだろう」

### C 調査結果（写真66～70）

遠藤氏が平場Ⅰとした、平坦面の西寄りに計画された四阿の基礎部分全面（9㎡）を発掘調査した。城跡への影響を避けるため重機は使用せず、すべて手掘りとした。

調査地の北側半分は先に建設されていた四阿の基礎によってⅢ層まで掘り込まれていた。基礎部の及んでいなかった南側で、層序を確認したが遺構・遺物の検出はできなかった。

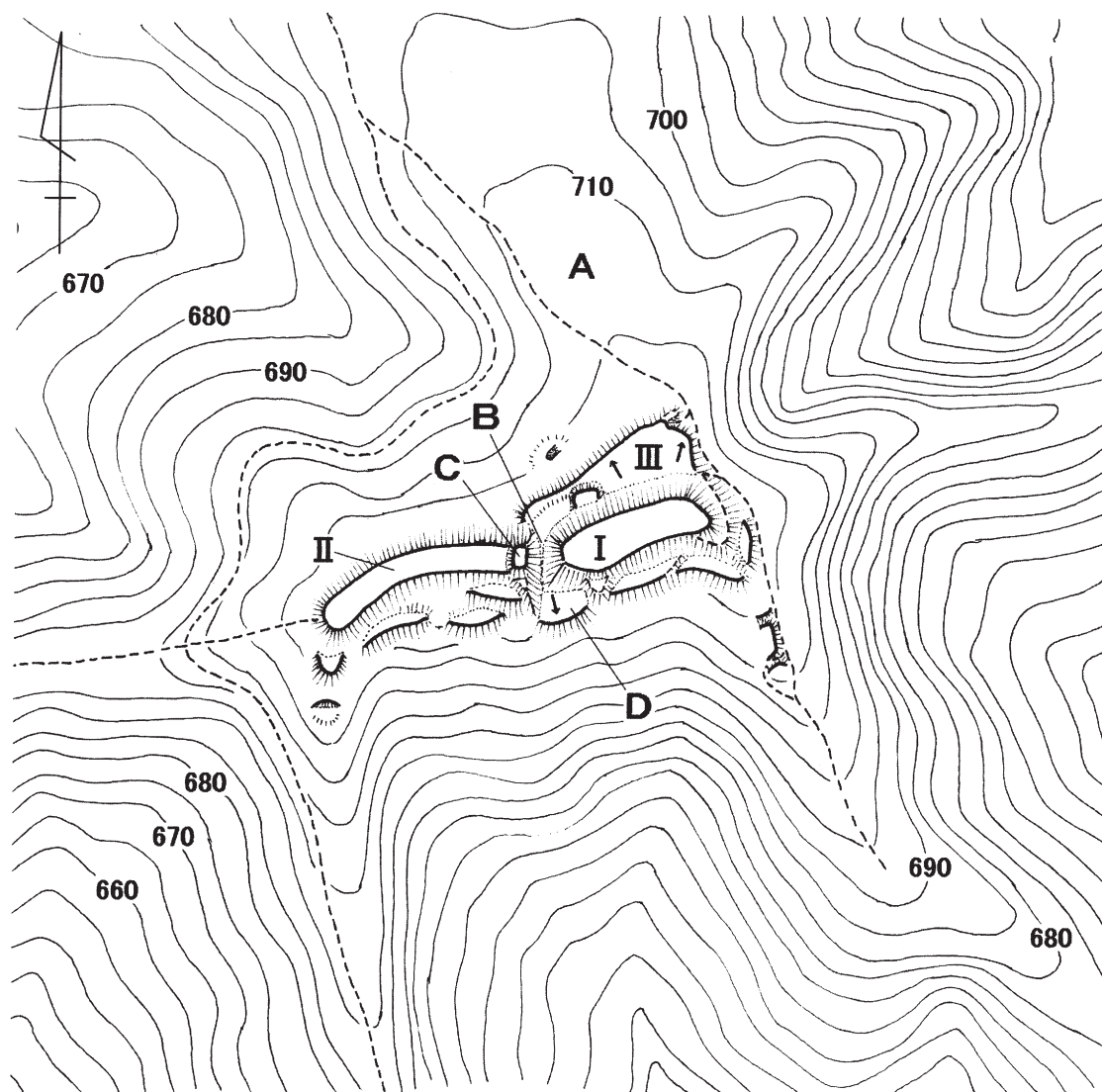


図34 鼻見城跡遺構概要図 作成：遠藤公洋（遠藤2018）

層序はⅠ層（表土）（10cm前後）、Ⅱ層（礫混じり灰黄褐色土層）（20cm前後）、Ⅲ層（明黄褐色土混じりの礫層）（50cm以上）となる。遺跡周辺で広く分布する黄色粘質土層（ローム層）は、まったく検出できなかった。Ⅱ層・Ⅲ層は黄色粘質土層（ローム層）よりかなり古い時代のものと思われる。おそらく、城の構築にともない平坦面を確保するため（上層を）削平したことを示しているのであろう。

小規模な調査ではあったが、遠藤氏の「平場は水平に造成され、一定の時間をかけて普請や管理が継続された様相がうかがえる」との指摘を追認する結果になった。

四阿の建設による遺跡への影響は小さいと判断し、調査を終了した。なお、四阿の建設にあたっては進入路を設けたりせず、現状を維持した工事を実施することを担当課および施工業者と確認している。

## 7 北屋敷遺跡（図2-7）

### A 概要

所在地 飯綱町大字川上2220番地1

北緯 36° 74' 58"

東経138° 20' 76"

原因 個人住宅（倉庫）建設

調査方法 試掘調査

調査期間 平成30年11月8日

調査面積 5㎡

出土遺構・遺物 なし

### B 調査の経緯と遺跡の概要（図35）

北屋敷遺跡は平成10年（1998）に実施された牟礼村遺跡詳細分布調査において周知された遺跡（図1-20）である。遺跡からは中世の土器片等が表採されていた。遺跡は飯縄山東山麓の傾斜地に位置している。周辺は遺跡の多い地域で、北西に横道遺跡（13）、北東に仲島遺跡（14）、南に築地屋敷遺跡（22）等が存在している。

平成28年に個人住宅建築、平成29年には町道拡幅に伴う試掘調査が実施されている（小柳2018）。平成28年の調査では、遺構は検出できなかったが土師器と縄文土器が少量出土している。層序は、Ⅰ層（表土：耕作土）（20cmほど）、Ⅱ層（黒色土層：礫多く含む）（30cmほど）、Ⅲ層（ローム混じりの茶褐色土層）（10cmほど）、Ⅳ層（赤みをおびた黄色粘質土層：ローム層）となっている。

### C 調査結果（図36、写真71・72）

倉庫建設予定地は平成28年に調査した住宅の隣地にあたる。建設予定地約30㎡敷地西寄りに、ほぼ南北方向のトレンチ（以下 T1）を1本設定し状況を把握することにした。工事は全面40cm、深部では55cmほど削平する計画であったので、保護層30cmを確保した85cmまで掘り下げることが計画した。長さ5m、幅1m

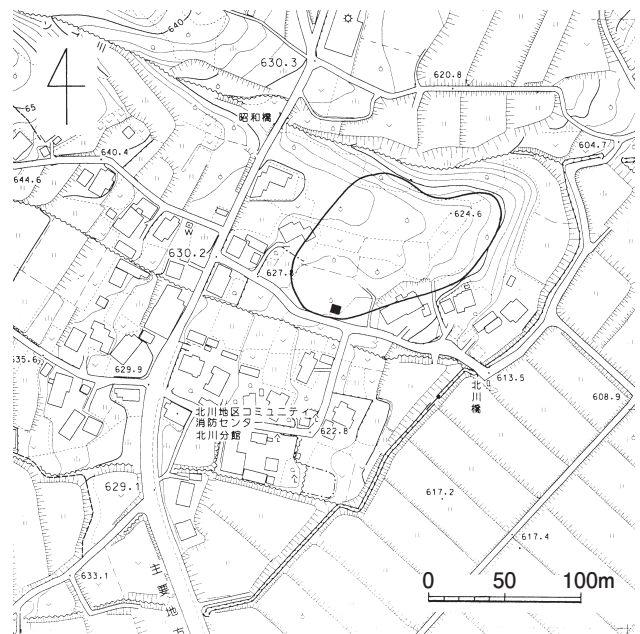


図35 北屋敷遺跡 範囲と調査地

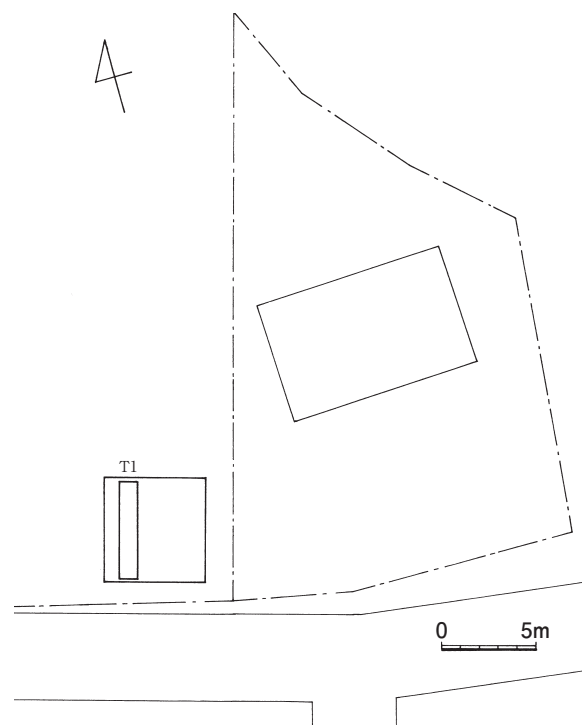


図36 北屋敷 調査位置図

のトレンチを設け、小型重機により順次削平していった。層序は、Ⅰ層（表土）（30cmほど）、Ⅱ層（黒色土）（40cmほど）、Ⅲ層（ローム混じりの茶褐色土層）（10cmほど）、Ⅳ層（赤みをおびた黄色粘質土層：ローム層）となる。Ⅱ・Ⅲ層には大きな礫が多数含まれていた。Ⅲ層下部からは手掘りで精査したが遺構は検出できなかった。遺物も検出はできなかったため、工事は遺跡に大きな影響を与えないと判断し調査を終了した。

#### 関係する主な文献

- 宮脇 昌三・矢羽 勝幸 校注 1977 「文化三一八年旬日記写し」『一茶全集第二巻』信濃毎日新聞社
- 宮脇 昌三・矢羽 勝幸 校注 1976 「七番日記」『一茶全集第三巻』信濃毎日新聞社
- 田山 花袋 1899 「北信の遊跡」『南船北馬』博文館
- 『信濃寶鑑』三巻 1901 名古屋光彰館
- 信濃史料刊行會 1956 『信濃史料第一巻上』
- 清水 勝治ほか 1960 『中郷村史』
- 小林 孚 1970 「遺跡探訪（4）上水内郡三水村赤塩遺跡」『長野』第29号 長野郷土史研究会
- 小林 孚 1976 「縄文中期」『上水内郡誌 歴史篇』上水内郡誌編集会
- 大久保邦彦 1979 「三水村上赤塩遺跡出土縄文中期中葉の深鉢形土器」  
『研究ノート3 地域研究の方向』千曲川水系古代文化研究所
- 三水村誌編纂委員会 1980 『三水村誌』三水村役場
- 小林 秀夫 1982 「長野県における内耳土器の編年と問題」  
『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市その5—昭和52・53年度』  
長野県教委ほか
- 村田 文夫 1985 「発掘調査された十三塚」  
『十三塚』神奈川大学日本常民文化研究所調査報告 第10集 平凡社
- 野村 幸希 1986 「塚」『日本歴史考古学を学ぶ（中）』有斐閣選書
- 寺内 隆夫 1991 「長野県上水内郡三水村・上赤塩遺跡出土の縄文中期土器について」  
『長野県考古学会誌61・62』長野県考古学会
- 三水村教委 1992 『三水村の文化財』
- 小柳 義男 1992 「平出三本松遺跡」『平出遺跡群発掘調査報告書』牟礼村教委
- 飯山市誌編纂委員会 1993 「飯山藩と幕府領の成立」『飯山市誌歴史編（上）』
- 両角 まり 1996 「内耳鍋から焙烙へ」『考古学研究』第42巻第4号
- 小柳 義男 1997 『上赤塩遺跡発掘調査報告書—縄文中期の集落址—』三水村教委
- 牟礼村教委 2000 『牟礼村遺跡詳細分布調査報告書』
- 佐野 賢治 2000 「塚」『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館
- 久遠 義正 2002 「三水村の多数塚群について」『いづな』第33号 飯綱郷土史研究会
- 永井久美男 2002 『新版中世出土銭の分類図版』高志書院
- 中野 亮一 2009 『（主）長野荒瀬原線（四ツ屋バイパス）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』  
長野県埋蔵文化財センター
- 笹澤浩・原田勝美ほか 2014 『表町遺跡』飯綱町教委
- 飯綱町教委 2016 『飯綱町遺跡詳細分布調査報告書』
- 小柳 義男 2017 『長野県上水内郡飯綱町 平成24～27年度町内遺跡発掘調査報告書』飯綱町教委
- 町田あかり 2018 「戦国時代の遺構〔旗塚〕の研究」『市誌研究ながの』第25号 長野市公文書館
- 遠藤 公洋 2018 「飯綱町所在の中世城館跡について—遺構の特色と性格—」  
『飯綱町の歴史と文化』第5号 いづな歴史ふれあい館
- 小柳 義男 2018 『長野県上水内郡飯綱町 平成28～29年度町内遺跡発掘調査報告書』飯綱町教委



写真1 二十塚全景（遠景は信濃町方面）

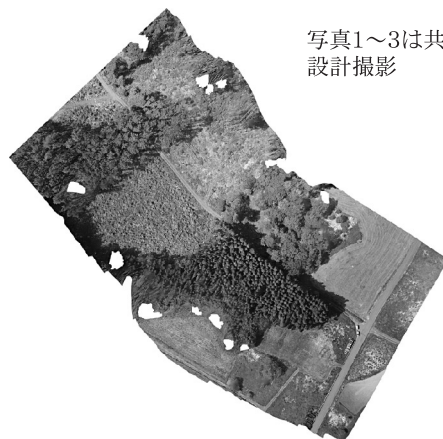


写真1～3は共栄測量  
設計撮影

写真2 二十塚全景（上空から）



写真3 手前切株ある塚は15号塚



写真4 11号塚全景



写真5 11号塚調査状況



写真6 11号塚 開元通寶出土状況



写真7 11号塚壁面



写真8 11号塚壁面



写真9 14号塚全景



写真10 14号塚調査状況



写真11 14号塚 皿出土状況



写真12 14号塚壁面



写真13 15号塚全景



写真14 15号塚硬い面の広がり



写真15 15号塚硬い面の広がり



写真16 15号塚硬い面の重なり



写真 17 15号塚 紹熙元寶出土状況



写真 18 15号塚 紹熙元寶と景祐元寶（左）出土状況



写真 19 15号塚壁面



写真 20 17号塚全景



写真 21 17号塚 大きな石検出



写真 22 17号塚調査状況



写真 23 17号塚 硬い面の広がり



写真 24 17号塚 硬い面の広がり（北西方向より）

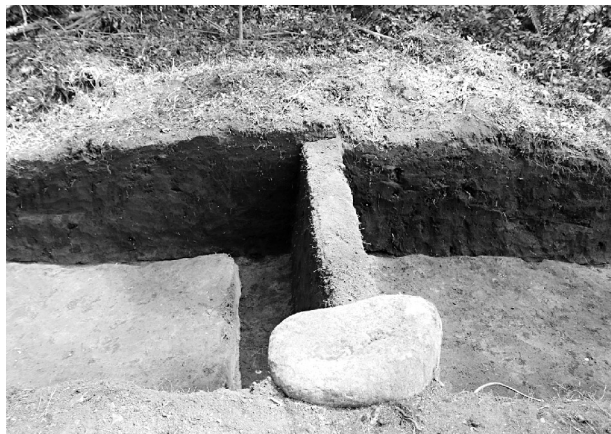


写真 25 17号塚壁面



写真 26 12号塚（手前）・13号塚（奥）全景



写真 27 12号塚 硬い面の広がり（東南方向より）



写真 28 12号塚 硬い面の広がり（北方向より）



写真 29 12号塚調査状況



写真 30 12号塚 硬い面の広がり（北西方向より）



写真 31 12号塚 硬い面の広がり（南より）



写真 32 12号塚壁面（東南方向より）



写真 33 12号塚壁面（南方向より）



写真 34 12号塚壁面（西方向より）



写真 35 12号塚壁面（東方向より）奥は13号塚



写真 36 13号塚全景



写真 37 13号塚調査状況



写真 38 13号塚 頂部下の硬い面（北東より）



写真 39 13号塚硬い面の広がり（東南方向より）



写真 40 13号塚 内耳鍋（焙烙）出土状況





写真 41 13号塚 内耳鍋（焙烙）出土状況



写真 42 13号塚壁面（北方方向より）



写真 43 13号塚壁面（東南方向より）



写真 44 13号塚壁面（東南方向より）



写真 45 13号塚壁面（南西方向より）

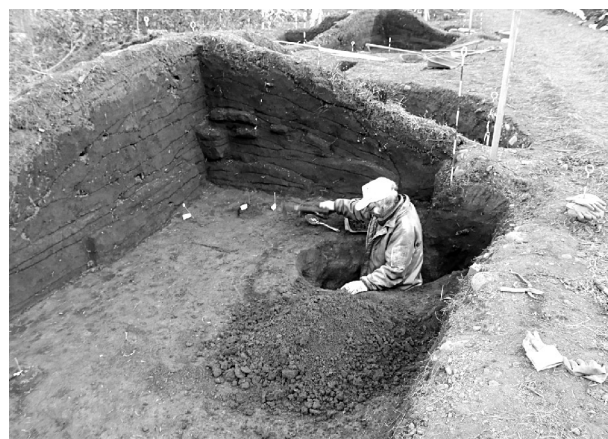


写真 46 SK1調査状況



写真 47 13号塚壁面とSK1



写真 48 12号塚（手前）、13号塚調査終了時



写真 49 上赤塩遺跡T1 調査状況



写真 50 上赤塩遺跡T6 調査状況



写真 51 上赤塩遺跡 T3-T6 間拡張区調査状況



写真 52 上赤塩遺跡調査状況



写真 53 上赤塩遺跡遺物出土状況)

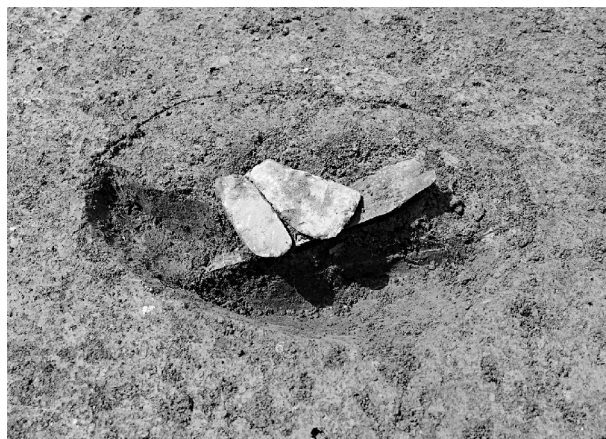


写真 54 上赤塩遺跡遺物出土状況

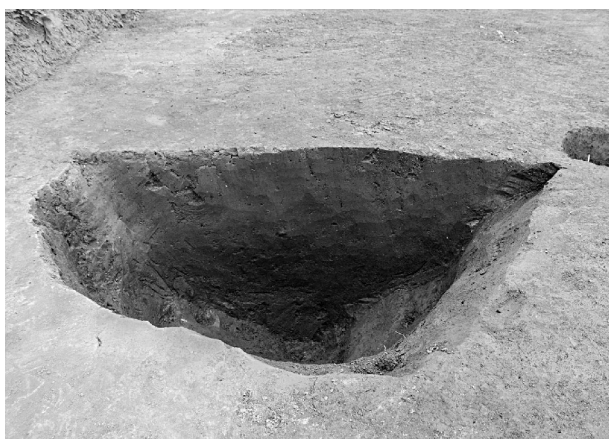


写真 55 上赤塩遺跡SK1



写真 56 上赤塩遺跡SB2とSD1



写真 57 上赤塩遺跡SD1



写真 58 上赤塩遺跡道路からの進入路調査



写真 59 大日影遺跡全景



写真 60 大日影遺跡調査状況



写真 61 七割遺跡全景 (遠景は矢筒城跡)



写真 62 七割遺跡T1調査状況



写真 63 七割遺跡井戸状遺構



写真 64 七割遺跡柱穴検出状況



写真 65 七割遺跡調査区全景



写真 66 鼻見城跡を望む（右寄り山頂部）



写真 67 鼻見城跡調査地



写真 68 鼻見城跡調査状況



写真 69 鼻見城跡調査区（左側古い四阿の基礎）



写真 70 鼻見城跡調査区



写真 71 北屋敷遺跡調査状況



写真 72 北屋敷遺跡T1

## 報 告 書 抄 録

書 名	平成29・30年度 飯綱町内遺跡発掘調査報告書 一二十塚ほか一					
副 書 名						
シリーズ名						
編 著 者 名	小柳義男					
編 集 機 関	飯綱町教育委員会					
所 在 地	〒389-1293 長野県上水内郡飯綱町大字牟礼2795-1 TEL 026-253-2511					
発行年月日	平成31年（2019）3月25日					
所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
二 十 塚	ながの けんかみみの ちくんいづなまちおおあざ 長野県上水内郡飯綱町大字 芋川2158・2161	20590	190	20180709～ 20180720・ 20181017～ 20181107	85㎡	保存目的の 範囲確認調査
		世界測地系 北緯 36° 47' 07" 東経138° 14' 38"				
上 赤 塩 遺 跡	ながの けんかみみの ちくんいづなまちおおあざ 長野県上水内郡飯綱町大字 あかしお 赤塩798・799-1・799-2	20590	161	20180508～ 20180613・ 20181015	411㎡	個人住宅 兼 店舗建設計画
		世界測地系 北緯 36° 45' 18" 東経138° 16' 51"				
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代		主 な 遺 構	主 な 遺 物	
二 十 塚	塚 群	(中)・近世		塚	古銭（北宋銭・南宋銭）、内耳鍋（焙烙）、カワラケ、砥石	
上 赤 塩 遺 跡	集 落	縄文時代		住居跡・土壇・溝状遺構 柱穴	縄文中期土器・土偶 打製石斧・磨製石斧・石皿 ドングリ類の実	

## 平成29・30年度 飯綱町内遺跡発掘調査報告書 一二十塚ほか一

発行日 平成31年 3月25日

発 行 飯綱町教育委員会  
上水内郡飯綱町大字牟礼2795-1

印 刷 信毎書籍印刷株式会社  
〒381-0037 長野市西和田1-30-3